②

0053370000

0053370-000

720-99

旅の伝説玩具

万造寺竜・著

旅行界発行所

昭11

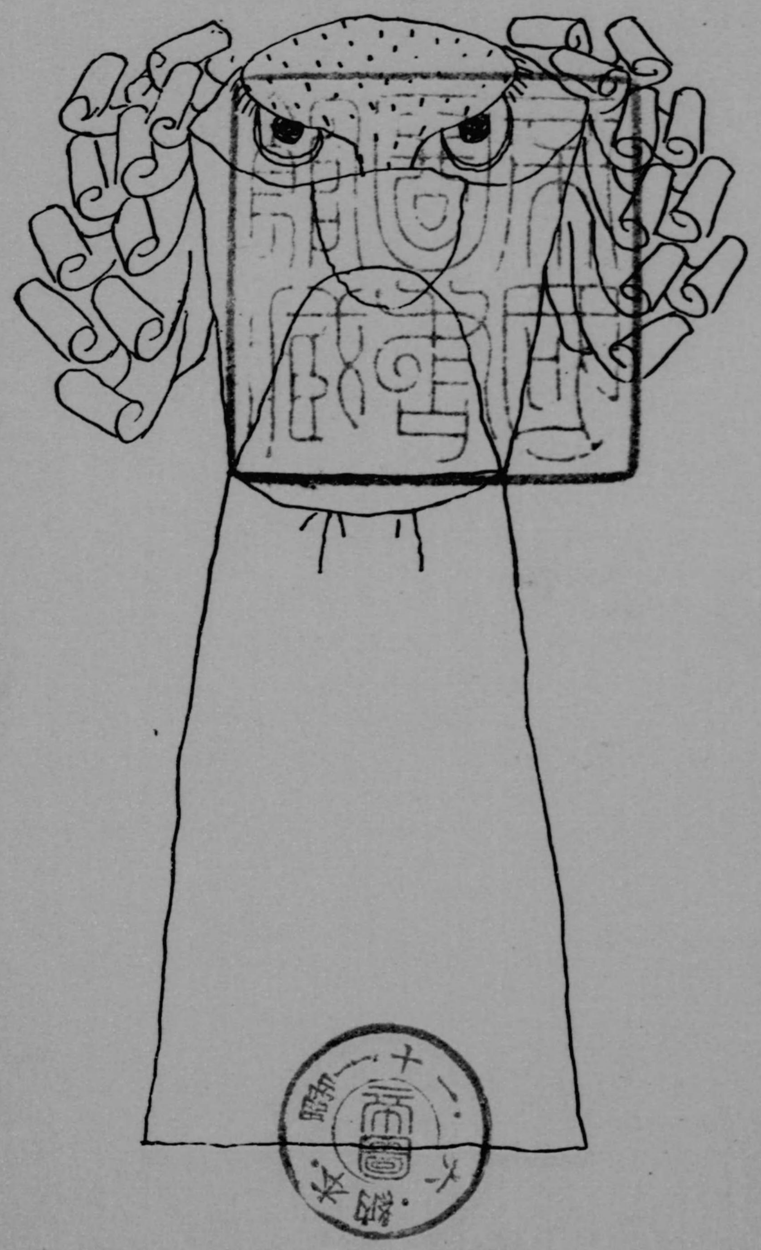
AIA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

720
99

.803

旅の傳說玩具



萬造寺龍著

發行所 旅行界發行所

720
99

八日堂の蘇氏將來……一
おきのさん……二
金比羅でこ……五
牛祭の面……七
木ノ葉猿……八
伊達男の辨慶……一二
ぶうやれ……一五
住吉の初辰さん……一六
今戸の河童……一八
淡島明神の守雛……一九
鳴子のこげしぼうこ……二一
岩木山神社の蘇民將來……二二
靜御前……二三
賴朝の像……二五

浦佐の猫面……二六
おきん女……三〇
圓通寺の馬守札……三一
手向山の繪馬……三四
えんぶり烏帽子……三五
神様と墓……三六
三春駒……三九
便所の神様……四一
鯛車……四三
潮滿珠と潮乾珠……四五
粉河の流し雛……四七
天狗の面……四九
おかめの面……五〇
おとん女郎……五二

譽田の埴生馬……五五
善知鳥……五八
桐原の藁馬……五九
ちやぐちやぐ馬こ……六一
夜叉神面……六二
唐招提寺の團扇……六四
米内の獅子頭……六六
オシラ様……六七
古賀の馬乘猿……七〇
笹野才藏……七二
新田神社の矢守……七四
なまはげ……七五
柳森の親子狸……七七
建前雛……七九

淨願寺の禿さん……八〇
迦葉の天狗面……八二
河童竹……八三
齋藤實盛……八五
吉野藏王堂の蛙……八六
善光寺布引の牛……八七
奉公さん……八八
法華寺の犬守……八九
永平寺の豆太鼓……九〇
友引人形……九一
相合傘……九三
金魚の提灯……九四
八幡駒……九七
松山の女達磨……九八

けんばい……一〇〇
野間大坊の木太刀……一〇二
豪徳寺の招ぎ猫……一〇四
招ぎ猫……一〇六
饅頭問答……一〇八
傳法院の狸……一〇九
嫁おどしの面……一一二
吉備津の犬……一一四
權兵衛種蒔き……一一五
分福茶釜……一一七
口入稲荷……一二一
法華嶽寺の鶏車……一二四
大國魂神社の烏扇……一二五
縣別土俗玩具抄……一二七

八日堂の蘇民將來

長野・神川

時は神代の頃、素盞嗚尊が征夷の旅に出られてのある一日、途上に日が暮れてやむなく、そ知らぬ人家に宿を乞はれたことがあつた。

一軒の主人はそれと知らず尊をばこばんだが、もう一軒の主人は、尊を招じ入れて尊とは知らず貧しい中で歡待して、旅の勞を犒つた。その主人こそこの蘇民將來の名の主だつたのだ。

尊は、そのために非常によろこばれて、出立なさる時に、この家の子孫と名乘る諸人の疫病を除き必ず多幸であるやうにさせるであらうと告げて去られた。

その誓にと與へて行かれたのが、この蘇民將來である。

八日堂で授與するものは、柳材の六角の塔形で、「大福長者蘇民將來子孫人也」の十

二字を赤黑で一面づゝに書きわけ、屋根と胴に赤黑で模樣が描いてある。

おきのさん

埼　玉・熊谷地方

相模國太陀郡の辨才天の神官におきのと呼ぶ一人の娘があつた。氣立がやさしいといふのが村中の評判で、繁忙期になると、百姓達がよくこの娘をかりに行つた。神官もまたいい人であつたのでよろこんで娘を手傳ひにかして呉れたものだ。

で例によつて、百姓が養蠶のために手が不足したので、その娘をかりに行つた。

ところが、その時、神官の家に出産があつたので、その娘がかりられなかつた。神官も娘も大變氣の毒がつてくれるのだつたが、百姓もあてにしてゐたものだから、がつかりして家へ戻つて來た。

すると、神官の娘が、さつき斷つたばかりなのに、ちやんと家に來てゐて、都合が

つきましたからといふので、百姓は大いによろこび、その日から毎日手傳つて貰つて居た。

その後數日も過ぎて仕事も一切りになつたので、その娘をかへすことになつた。百姓がその娘を神官の家へと送つて出、武皇神社の前まで來ると、娘は一寸お參りさして下されと云つて神社の境内へ入つて行つた。で百姓はそこに待つてゐたが、いくら待つてもかへつて來ず、とう〳〵夜になつてしまつた。そこで心配してそのまゝ神官の家を訪れたところが不思議なことには、その娘がちやんとかへつて來てゐて、家に働いてゐるので安心し、いろ〳〵禮を述べると、娘はあなたの家へ手傳ひに行きませんでしたといふのであつた。

神官も不思議がり、百姓に聞いて見ると、たしかに娘が手傳ひに來、神社の前で別れて境内に入つたといふので、それならば、或は辨才天のお使ひであつたのかも知れないから行つて見ようと云ふことになり、提灯に灯を入れて、百姓と二人で神社に行つてみると、社前に、その娘と顏のそつくりな頭の蛇が居つた。そこで神官がいろいろと禮をのべたところ、どこかへ姿をかくしてしまつた。

このことがあつてから、神官は手傳ひを頼みに來る百姓があると、娘の身替りに紙の姉様を手渡したといふ。

その娘の身替りの紙の姉様こそおきのさんで、そのおきのさんがよく働いてくれる、おきのさんを信心すれば、蠶の手傳もしてくれますと、このあたりでは云つてゐる。

また嫁や作男や子守が怠け者だつたら、このおきのさんを信心すれば、必ず働くやうになつて來ると、このあたりでは云つてゐる。

そのおきのさんはといふと、赤いメリンスの帶をしめた四五寸の紙の姉様である。

金比羅でこ

香川・琴平

神様を賣物にして、惡事を働く惡い奴は、今にはじまつた譯ではない。遠い昔からあつたのだ。

この金比羅デコなども、その一つを物語るもので、このデコは金紙、銀紙の烏帽子をこそ被つて居れ、後部をつまんで、どうちや白狀致すかと云ふと、大きな眼玉をクルリと、ひんむいて、恨めし相に人の顏を睨むで舌を出す。なる程厭な奴等だ。白い顏は松太夫、赤い顏の方が權太夫といふ惡人なそうである。

この二人が讃岐の琴平に潛入し衆人をまんまと欺いて、さては金比羅神社の大權現にまでなりすまして、惡事の數々の三昧をしつくしてゐたのを、當時の寺社奉行小笠原山城守に發見されて、打首となり、獄門に晒された奴等である。

でこの二つの首人形を「獄門人形」とも云ひ惡事の露見で「ビツクリ泥子」とも呼んでゐる。

欺された善男善女の鬱憤をはらすために作られたものか、村童等は、これを神社の門前で買つて、眼玉をヒンムカしてはよろこんでゐる。

あの子どこの子だ、金比羅デコだ、人がもの云ひや、舌を出す、爾來幾星霜、いかに惡黨とは云へかうまで永い間責め苦しめられては、松太夫、權太夫もやりきれなくなつたのであらう。

その後彼等の惡靈は再び、亡者となつて世に出て、斬首された高篠村拔川の河原にさまよひ出、行人を四つの物凄い目で、睨み出した。これには、さきの善男善女は勿論役人まで、怖れをなして、參つてしまつた。

「拔川には夜目が光る 松太權太夫の目が光る」これはその時の俚謠である。そこで彼等の打首になつた二百年後文久三年十一月に、善男善女等はその怖ろしさにたまりかねて、その松太權太の二人の塚を拔川の河畔に建て、松田宮として、その靈を祀つて、逆に勸べんして貰つた。

牛祭の面

京都・太秦

京都太秦の廣隆寺での牛祭の夜に頒與する、五つの面で着想が珍らしいところから珍重され、この面を家の入口または、床柱に懸けておく時は、厄事災難を除けるといふ禁厭になつてゐる。

牛祭といふのは毎年十月十二日の夜九時から廣隆寺で行はれる祭典で、昔三條院の長和元年に高僧惠心僧都が、念佛守護の守りに、夢の告げによつて、摩陀羅神を勸請した時の法會を繼承したものだ。

「都名所圖」による

毎歲九月十二日夜戌の刻に、牛祭の神事あり、當寺の僧侶五人五大尊の形に扮し、異形の面をかけ風流の冠を着し、太刀を佩、賣人は幣を捧げて牛に乘り、四人は前後を圍み、從者は松明をふり立て、行列魏々として本堂の傍より後へ巡り、又西のかたより祖師堂の前なる壇上に登り、祭文を讀み、此文法古代の諺を以て述る、甚だ奇に

して諸人耳を驚さずといふことなしとあるがその祭文を終ると、摩吒羅神は四天王を引具して、祖師堂へ逃げ込む、その時に、數千の見物人は、爭つてその面を奪はうと騒ぐ、これが祭の全景なのだ。

その時の面が、これで四天王の被る赤青呵吽と摩吒羅神の五種である。

木ノ葉猿

熊本・木ノ葉

かねてから虎の齒の里に隱栖してゐた、都の落人があつたが、元正帝の養老七年の元旦に、衣冠正しい老翁が來て、「お前は罪なくして都を落ちた者であるから、深草に鎭座する春日大明神を遷し奉ると必ず奇瑞が現れるだらう」と告げる夢をみた。

落人は、不思議な夢をみたものだと思つたが、月日がたつにしたがつてそんな夢のことは忘れてしまつてゐた。

すると八月の朔日に春日の神勅だと云つて見知らぬ男が迎へに來たので、「あゝ、あの夢は本物か」と知つて、大急ぎで大和へ出かけ春日の宮を奉じて、虎の齒の里へ遷し奉つた。

そして十月九日にその遷座祭をとり行ふことにして、先づ同日雨山（木葉山）の土を採つて神前の平盆を作り、その殘りの土を、廣前に投げたところ、不思議にもその土くれが猿の形に變り、眼が出て、鼻がつき、手足が出でゝ忽然として、飛び去つてしまつた。

で社前にゐた一同の者が呀然としてゐたら、こんどは一丈あまりの天狗のやうな赤面鼻高の怪物が現れて、「汝等雨山の土を採つてましらの形を作らば眞幸」と告げてまた消え失せてしまつた。

そこでその言葉によつて作り出したのが、この木葉猿なのだ。

したがつてこれは、雨山の土の手捻りであるが、堂々たる名作品であり、おそらく郷土玩具中の最高峰のものであることは、誰しも否まないであらう。

此處に「由來書」なるものがあるから寫して置かう。

抑々木葉猿の由來を尋ぬれば、忝なくも人皇三十六代、孝德天皇の御宇大化二年、國司を定め、關所を立て給ひし頃、如何なる都の落人にやありけん、故郷かよふ夢だにも、空恐しく、虎の齒の里に詑住ひして、年月を送りけるが、忝なくも、人皇四十四代、元正天皇の御宇養老七年正月元日、奇異の瑞夢を蒙り、共々會集して物語るに衣冠正して老翁忽然として枕に立ち給ひ、汝罪なくして都を出で、せき〳〵の科を恐れ、この山里に詑住ひしぬれば、宇多郡深草の社に鎭ります、かけまくも畏き春日大明神を遷し奉るべしとて雲のあなたに飛び去り給ふと見えて、夢さめぬ。

されど夢のはかなさは、昔よりいひならひけん。徒に月日を送りける程に春も立ち夏も暮れ葉月朔日の黄昏、彼四人の家に一人の旅人見えて訪ふ。

人々迎へ出でゝいづくよりと問へば、大和國なる春日の神勅たりとありて、秋の嵐のあとたえぬ。

されば夢の告げ疑ひなしとて、同二日曉より筑紫の海の八汐路經て、大和國に至りさま〳〵の調度したため、其往昔如何なる人にやおはしけん、家こぞりて、神輿に隨

從し、樂を奏して都を雲井の餘所に見捨てゝ、西海の波を凌ぎ、その頃所謂土車の郡山北の庄虎の齒の里の、清らかなる山邊に宮柱太敷く立てゝ、内外の玉垣磯き溜あらじと、朝風夕風の吹きはらふことの如く、朝となく、夕となく齊きまつりて、年立つ春のはじめには、はき弓射て神の祭とし、十月九日を生日の足日と定め、雨山の赤土を、かきとりて平盆を作り、海、山の神つ物を捧げて、其樂を奏す。

其盆の餘れる土を廣前に、投げけるに猿の形を顯し、眼面具足し、忽然として飛び去りぬ。人々奇異のおもひをなしけるに、鼻高く、面赤く、身の長一丈あまりなるが現れ出で、汝等雨山の土もて、ましらを作らば、眞榊の眞幸とて、何方ともなく消え失せぬ。

其の後數百年の星霜を送りて、四家に分れ、氏姓を改め、御平盆と共に之を作り、神の御器とす、神變奇異の禍災ある時は、四家の子孫此の樂を奏して、感應あらずといふことなし、近村の雨乞の樂となりぬ。もろ〳〵の燒物諸氏の要器となり、此の猿惡病災難のがるとの古き言傳ありて、現今千匹猿と一名して、姙娠無き方の守神として、都鄙こぞりて、求めずといふ事なし。

伊達男の辨慶

愛　知・名古屋

國史によれば武藏坊辨慶は奥州平泉で死んでゐるが、傳說の辨慶は、死んだところか、平泉の衣川での討死はまつたくの嘘傳で、あれから義經にしたがつて、岩手山の麓を迂廻して、弘前に逃がれ、それから海を渡つて、北海道のビラトリに出現した上またもや船でコースを北へ唐に逃れてゐる。

話は尾籠になるが、辨慶が高館の裾を流れてゐる衣川のまん中に立ちはだかつて、剛弓をもつて、たつた一人で敵勢を防いでゐたのは、決して決死的勇斷がさせたのでなく、その時彼は大變な下痢にかゝつてゐたからで、垂れ流しの便法によりつゝ且敵勢を防いでゐたのだつた。

したがつて同じ場所を動かないでゐたので、彼を見たものが立往生したと思つたのも無理はない。急激にさし込んで來る腹痛とその後を襲ふ下痢とで彼は、時々手も足も出なかつたといふ話が殘つてゐる。

弘前地方でいふ頭九郎盛長が義經の事實變名とすれば、辨慶もやはり津輕富士の山麓に身を死から逃れ來てチャンと生きてゐた。

あの有名な弘前地方の春の行事のえんぶりに出て來る五人を支配する主は辨慶なのだ。

高館を死をもつて逃れた義經主從は、北海へ逃れ出る日を待つために、白氷を踏むおもひで長い冬を、津輕山麓で暮らさねばならなかつたのだ。

えんぶりの行事は、待ちに待つた春が訪れて來たといふその時に、歡喜のこゝろの發散したもと云つてよからう。

第一に欣んだのが辨慶だつた。彼は己れ等のよろこびのみでは足りないで、土民と共によろこびを頒けて、はしやぎまわりたかつたので、彼が京にゐた時分、殿上でやつた祭事の形式をまねてやつたのがえんぶりの行事なのだ。

その後で辨慶は、義經にしたがつて北海道に渡り、各地で轉戰してゐる。

その傳說の地として、特に有名なのが後志國の蘭越新見溫泉附近だ。

巨人としての彼の地での剛勇振りは、僅に二三年に過きなかつたが北海道に住む先住民族をじつに驚嘆、驚怖させてゐる。なんのための戰ひであつたかは判然としてゐないが、義經にからまつた傳說によると、一人のカムイを援けてそのカムイの勢力を擴張させてやるためだつたらしい。

或は、海外への發展の資本の寶玉を盜まんがためにカムイの名にかくれて義經がやつてゐたのかも知れない。

この島で唄ふ義經とカムイの妹八重姫との哀詩は、靜御前と義經以上に切々たるものであつて、彼等主從は島民の信賴を裏切つて、やがてこの島からも逃れて行つた。そして蒙古へ出現したといはれてゐる。

ところで辨慶の武勇傳といふものが不思議にも「京の五條の橋の上」以來あまりにも少い。

傳說として戰場に出てゐるのは衣川の戰ひと京の三條の館の澁谷金王丸の夜討の時

との二回であるが三條の合戰には、いみじくも金王丸を取押へ、ひつ抱へたまゝ首を刎ねたと、手柄ばなしに殘つてゐる。

ぷうやれ

愛媛・宇和島

牛と鬼と加へて二で割つたものがプーヤレである。

これは宇和島の祭禮に出る怪奇な山車からとつたもので、珍らしい形態を備へてゐる動物であつて昔加藤淸正が朝鮮征伐の折、この怪奇な動物を作つて、まつ先に立てて、攻めたてたといふのであるが、それにしても玩具の原型になつてゐるその山車のグロさには、近代人も唖然たらざるを得ない。

約半町にも渡らんとするこの紙張り怪物が、しかも林立した人間の足を、動かして小山の如くにゆらり〳〵とお祭りの日に町中をねり廻るのである。

しかもある家の前まで來ると、その怪奇な頭をユラリとのし上げて、家内をさし覗く。

すると家内の者は、緣起がいゝと禮拜して、よろこぶのである。

町中の子供は、竹法螺をこさへて貰つて、この怪物をとりまいてブー〳〵と吹きまわつてゐる。

ヤレ〳〵と怪物の中の足は囃して、ゆらり〳〵怪物は通り過ぎるのである。

ブーヤレの名は、そこから出たのだとは、一寸あつけない。

住吉の初辰さん

大阪・住吉

廢寺の再建に豪德寺の招き猫があり、商店の繁榮に客を招ぎ込んで呉れるぶち猫があるかと

思へばこの初辰さんは、二、三寸のものではあるが、いかめしくも羽織姿で商賣の發達をさせて呉れるといふから、商人にとつては、これ程有難いものはないお猫樣だ。だからして、住吉神社の末社楠玉神社の例祭はこの猫で賑ふわけだ。商賣するものは誰しも、この初辰さんが欲しくないものはない。まして、四十八體揃ふと、始終發達するといふのだから、たまつたもんぢやない。わしも行かう、われも行かうと初辰の日は、賑ふわけだ。

ところで、この初辰さんも馬鹿ではない。智慧者だから、おいそれと全部が全部を發達させてやつたら、神國の日本も商賣人ばかりの世となり、右へ向いても左へ向いても、商賣人ばかりでは繁昌で、忽ちつぶれてしまふことは知つてゐられたので、凶事があつたら、玉垣の中に捨てゝやり直せと仰言つた。

四十八體揃ふには、四十八箇月卽ち四年間もかゝる勘定だから、四年間のうちにはよほど幸運な人でなければ、凶事なしでゐられない。

したがつて、玉垣の中へ捨てた初辰さんも、また山と積まれてゐる。

おゝ、四十八體、なんと辛棒と苦勞が、いることよ、そこに商賣發達の秘傳が、も

られてゐるのだ。

今戸の河童

東京・淺草

今戸の百姓に白い馬を飼つてゐたものがあつた。

或朝厩へ行つて見ると、河童が河岸まで、馬を引つぱり出して川へ曳き込まうとしてゐるので、百姓が怒つて、鎌で河童を叩切らうとすると、河童は掌を合せて「じつは川の中に悪い魚がゐて、われ〳〵に邪魔をして困るので、馬の尻尾の毛で罠を作つてその魚を捕るつもりでした」

と泣いて平謝りにあやまるので百姓は可哀そうに思ひ、それならばと馬の尻尾の毛を四五本抜いて呉れてやつた。

すると翌朝河童がやつて來て、お禮にザク〳〵と大判や小判をたくさん置いて行つた。それ以來この百姓は大金持となつたので、河童の形を作つて神棚に上げて祀つたといふのが今戸の泥棒河童の傳說である。

その頃の今戸は一面の田畠であつた。そして利根川の上流の猫子様と云ふ河童の一族がよく、江戸川、中川、荒川、隅田川と流れにまかせて出現しては悪戯をしてまはつたものだ。

淡島明神の守雛

和歌山・加太

淡島明神は女身の神様で、夫婦が揃つて參詣しようものなら、ひどく叱られると云はれてゐる。しかし淡島明神だつて、女だ、昔からそんな神様ではなかつたにちがひないが、昔ふとしたことから下の病をわづらつたのが原因で住吉明神が怒つて、海に

流したそれ以來叱るやうになつたのだ。加太に來られたのもそのためで、その後は加太にあつて、女の味方として特に女の下の病一切を引き受けて癒してゐられる。

しかし淡島明神もそこが女神ゆゑ、住吉明神に棄てられたのが殘念で、夫婦仲睦じく參詣でもしようものなら、仲を裂くと叱る日があつても仕方があるまい。が、紀伊名所圖繪には「殊に夫婦妹背の守り、子無き女には是を授け、安胎平產を護り賜ふ」と書いてあるところを見れば、世にいふそれ程のこともなく、夫婦が表向揃つてさへ行かねば、叱られもせずにしまひさうである。

この神社で出す守雛は有名なもので、この紙雛を社のうしろの齒黑石の凹の水にひたすと緣附が早くなると云はれてゐる。下の病の人は、下をソツとこの雛で撫でゝ人の見ぬ間に海へ流すがいゝ、そうすれば必ず全快する。

淡島明神の神詠に「我たのむ人の惱みをなごめずば、世に淡島の神といはれじ」とうたつてゐる。

ことさやうにこの明神は、下の病の名醫であると共に、自信をも強く持つてゐらるる神なのだ。

鳴子のこげしぼうこ

宮城・鳴子

源平の戰ひに立役者として華々しい戰さをした義經の末路は、またあまりにも、みじめなものであつた。

これは誰しも國史を繙くたびに悲憤を禁じ得ないであらう。弓矢をとつては天下にならぶものがなかつた常勝將軍義經も兄頼朝の勘氣にあつては、ひとたまりもなかつたと見えて、僅か數人の從者を頼りに都を逃れ、みちのくへと希望のない旅をつづけた。

彼の都落ちも辛かつたであらうが、それよりも切なかつたのは白拍子靜との別離だつたであらう。

二人はわかれかねた。今日は明日はとこゝろに決めつゝも、みちのくへ來てしまつ

た。その時、靜は既に腹に子をやどしてゐた。

そして幾十日かの苦難の草枕を重ねて、鳴子まで來、十國峠で分娩した。その時の産湯が鳴子溫泉の元祖だつた。

そこで鳴子といふ名が生れ、その産聲をとり入れた鳴子のこげしぼうこは「キュツ、キュツ」と泣く。

岩木山神社の蘇民將來

青森・津輕

延曆の昔、坂上田村麿が征夷の勅令を奉じて、みちのくの津輕の地まで、くだつて來たが、夷賊を容易に征服することが出來なかつた。

そこで、この上は神明の加護を仰ぐより他なしと思ひ、日夜岩木山神社に祈願を籠めたところ、靈驗が現れて、いづこよりか偉大な男が來たり、傍の大柳の樹をひつこ

抜き、それを風車の如く振り廻し、賊軍に突入して一氣に平定した。

そして、柳の枝の削つたのを田村麿に與へて立ち去つたといふ。それがこれで、おそらくこの傳說は全國の蘇民將來の中での、特異の存在であらう。

靜御前

神奈川・鎌倉

文治の春、京で義經にわかれた靜は、義經を慕つて、吉野に行き、そこで義經と逢ふことが出來たが、そこでの逢瀨も束の間で、義經を落して忠信に連れられて、三吉野の奥へ逃れたが、鎌倉の野武士達に追ひつかれ、鎌倉へと連れて來られた。

そして畠山重忠のもとにあづけられたのである。

鶴岡八幡の靜のあの名高い舞ひは、その翌年の春である。

重忠の打つ小鼓の拍子で、その時秋の野の花盡しの水干に精好の袴をつけた靜が、切々なおもひをこめて唄ひ舞つた

しづやしづ、賤の苧環くりかへし、昔を今になすよしもがな

の歌は誰も知つて居よう。

賴朝の計畫は、そこで裏切られた。義經の行衞を、靜が知つてゐると信じてゐる賴朝が怒つたのも無理がない。

賴朝は、座を蹴つて退出した。そして重忠に靜を詮議せよと命じた。

鎌倉八幡宮の境內に賣つてゐる土偶は、その折の靜の舞ひ姿である。

その後重忠は、謀反人の汚名を蒙り、二俣川で賴朝の手兵葛西清重に殺された。

さて靜は、どうなつたか。宮城縣の名取郡の秋保溫泉に靜御前の墓のあるところをみれば、重忠のもとを出でゝ、三度みちのくに義經を慕つて行つたのにちがひない。

賴朝の像

神奈川・鎌倉

首を刎ねられる筈の小兒賴朝が、まさかに平家を亡ぼさうとは、當時誰が考へた者があつたらうか。池の禪尼や小松內府の助命の言葉が效を奏して彼は伊豆へ死からまぬかれて行つた。

賴朝にとつてのかなしい伊豆、こゝで賴朝は、父の慘死をきき、こゝで源家の再擧を誓はせられた。

相手は文覺上人と僧となつた澁谷金王丸だつた。

やがて運命は廻轉して彼賴朝は、首を刎ねようとした平氏を壇の浦に追討し、右大將となり、源家をして磐石の安きに置いた。

そのこんぱくが白旗明神の木像となつていま鎌倉に眠つてゐる。しづかな英雄の木

像。

時はめぐつて天正十八年七月のある日、この像を訪うた一人の武士があつた。それは旭日昇天の勢ひで北條を敗つての、かへりの豐臣秀吉だつた。彼は何おもつてか白旗神社に詣で、賴朝の像に近づくといかにもなつかしさうに、その肩をたゝいて、一代の間に天下を從へたのは貴公と拙者とだ。したがつて貴公を知るものは拙者であり、拙者を知つて吳れる者は貴公だけだと、云つてしばし涙ぐんだ。

あはれ一代の英雄のこゝろを知る者は一代の英雄だけか、それにしてもあまりにも賴朝と秀吉は似てゐる。

その賴朝の像を象つたのがこれである。

浦佐の猫面

新潟・浦佐

越後路は春とはいへ未だ寒く、丈餘の積雪に埋れ、人も馬も荒れに荒れ狂ふ寒い冬

の觸手にいたづらにほんらうされつゝ、春と逢ふべく惱んでゐた。

三月三日は春とこそいへ未だ冬のさなかである。この日、浦佐の毘沙門堂に裸身の押合祭が行はれる。この日が來ると新潟の南魚沼郡浦佐の毘沙門堂に集つて來る信心者の幾千は、皆褌一つの素裸體、素鞋だ。そして風雪をものかは、さんよ〳〵のかけ聲勇ましく大の男共が大蠟燭の灯の下に集つて、寒の終夜を堂內で裸體の身を、押し合ひ犇き合ひもむのである。

「積る白雪や一丈と五尺、はだかでかつぐ大蠟燭、だれは肩から腕へとたれる、押合祭は度胸だめし、ハーサンヨサンヨ

「龍の口から湧き出る水に行をしてから御堂に入り、押して押されて押されて押して、七押し八踊夜は更けるハーサンヨサンヨ

この唄を聞いただけでも壯快の氣に打たれる。まして現實は大の男の肉彈戰の展開だからその壯烈さはおして知られよう。

話は何時の頃か、睦月のはじめだつた。そこひの杢市は、今日も雪ふりの中を、あはれつぽい按摩の笛を吹き〳〵通りかゝつたのが、この押合祭のある浦佐の毘沙門堂

中から招ばれた。

そして呼び込まれて、御堂の納所坊主の珍念を揉んでやつてゐたが、珍念の骨格が人間のそれとはちがつてゐる。さうおもつたら急に怖ろしくなつてつい揉む手を知らず〳〵にぴたりと止めてしまつた。すると揉まれてゐる珍念の身體がモク〳〵と伸び、見る〳〵うちに大山猫に化けて、眼を瞠り、牙を鳴らして、『こら、杢市、この場のことを口外致さば、直ちに貴様を喰ひ殺すぞ、忘れるまいぞ』と形相凄じく、つめよつたかと思ふと、怪風を呼んで、かき消すごとく、姿をかくしてしまつた。

杢市は堂外へころびでた。そしてあまりの怖ろしさに、立たなくなつた足を無理にふみしめて、町中へ出て、往き交ふ人々にこの怖ろしい話をふれて歩いた。

話は忽ち町内へ擴がつた。

その翌朝は、町内に大山狩のふれが出た。ところが山狩をしたが夕方になつても山から子猫一匹も出なかつた。そこで、今度は方途を變へて、毘沙門堂を幾重にも人で圍んでしまつた。

そして堂内へ大勢の勢子達を雪崩れ込ませた。堂は小さく勢子は大勢だからたまら

ない。押し合ひ犇し合ひの騒ぎだつた。その中へどう迷つたか、天井から猫が飛び降りた、そして忽ち勢子共の足下に踏みにじられてしまつた。

この日が一月三日だつた。その夜は堂守から祝ひ酒が出た。思はぬ獲物に狂喜した大勢の人達は、不時の饗酒に醉ひしれて、朝まで踊り狂つて飽かなかつた。

これが三月三日の押合祭の起因で、その後族上でこの話を左甚五郎が聞いて、この話に興を持ち、わざ〳〵出かけて行つて山猫の面を毘沙門堂の玄關の棟木に彫つた。

いまだにその左甚五郎の面があり、それが押合祭の後の七日の曉に悲しげに泣くといふ。

この面を象つて、青、白の二種に張子で作つたのが傳說玩具の浦佐の猫面である。

單彩眼には金、口に丹牙をむいた妖氣のある面である。

おきん女

熊本・日奈久

熊本の日奈久溫泉土産にべんた人形といふのがある。人形は辨太の創案によるものと口々に傳へられてゐる。おきんさんといふのもこれだ。

昔、濱田六郎左衛門といふ武士が、かなりの重傷を負うて、日奈久溫泉に來てゐたことがあつた。その時、六郎左衛門には、妻がなかつたと見えて、可憐な小娘おきんを連れてゐた。

この娘がじつに孝心厚く、日に夜についで病める父のために、身を盡す有様は近所近在のものゝ涙を絞つた。

そして、父が全快すると、この武士の父娘は何處かへ去つてしまつた。

村の者は、そのおきん女の孝心を忘れ得なかつた。その後おきんの孝心を慕ふものが村に出て、人形を作り、その名を、そのおきんの名にとつてひろくそれをひろめて、子供達に持たせて孝心を見習はせた。

人形と云つても、極くかんたんなもので、桐丸太に刀を入れて首をつくり、胴の前面を平にして、腹掛けを描き、同材の粗末な手足を赤木綿で胴に繋いである程度のもので、その彩色の稚拙に掬すべき味がもられてゐる。

圓通寺の馬守札

神奈川・伊豆

伊豆輕井澤の駒形堂は馬の神様として、近郷近在にその名がひゞいてゐた。

したがつて名馬を好む者の常として、愛馬家が見逃して置く筈がない、頼朝もその參詣者の一人だつた。

今日も彼鎌倉の右大將源頼朝は、供の者をひきつれて、愛馬磨墨に跨つて、さつさ

うと圓通寺の森へ現はれた。無論駒形堂へ參詣のためにやつて來たのだ。

圓通寺裏の密林の前にかゝつた時、いまゝで默々と主をのせて歩いて來た磨墨が急にたちどまつた。そして兩耳を立てると聲をふるはせて、一聲高く空に嘶いた。

磨墨の聲は、うつさうとした密林の奥へ遠くこだまして、かすかに消えて行つた。すると反響したかのやうに、密林の奥から勇ましい馬の嘶きが聞えて來た。

磨墨はつゞいて嘶いた。林の奥の聲の主もつゞいて嘶いた。そしてしばらく應酬がつゞいた。

馬上の主は不思議に思つた。そこで彼は足を鞍にあてると、馬をつと森の中へ乘り入れて、その聲の主を見守つた。

何といふいゝ馬だらう。毛並の美しい駿馬が、疾風の如く奥へ馳けこんで行くではないか。

馬上の主はそれを見ると供の者を招いだ。

「よい馬がゐる、山狩して捕へよ」と急き込んで叫んだ。

その馬こそは、圓通寺の和尚の飼ひ馬であつたが、手のつけられない氣あらな馬な

ので、和尚も寺男ももてあまして、森へ追放した馬だつたのだ。

やがて、頼朝の前に一頭の裸馬が牽かれて來た。

後に源平宇治川の先陣に、佐々木四郎高綱を載せて、功をほこつた名馬池月はこの馬だつたのだ。

頼朝は一眼みて世に無き名馬であることを知つた。そして一行にこの暴れ馬を加へ駒形堂に參詣して、鎌倉さして歸つて行つた。

この事を知ると圓通寺の和尚はハタと膝を打つた。そして早速寺男に命じて、板を削らせて馬守の札をつくらせ、この札を馬に下げさへすれば、その馬は必ず名馬になると云つて、駒形堂へ持ち込み多くの、參詣者に買はせた。

手向山の繪馬

奈　良・手向山

奈良と言へば、紅葉と言ひたいが、玩界の人なら、さしづめ手向山の繪馬といふだらう。

ことほど左様にこの手向山の繪馬は、尤作であるのだ。繪馬と云つても普通の繪馬でなく、臺座の上に立てた板馬であつて、古雅にして、描彩佳品なる點は、同じ板馬でも茨城の村松虚空藏堂から贈れる眞弓馬の上を往くものだ。

これは手向山八幡宮に奉獻するものであつて、昔、旱天に雨を祈るに、朝廷から雨師の神に黑馬を奉納し、霖雨に快晴を祈る時には、雨師の神に白馬を奉納したその習慣が、後になつて、繪に描いた馬になり、今日の板馬となつたものだ。

えんぶり烏帽子

青　森・八　戸

辨慶の時に書いた、えんぶりの行事（舊暦の春三日に渉つて行はれる）に被る烏帽子で、百姓に姿を變へた義經主從が、初春の祝ひに事よせて、島に逃れ出る日の近づいたよろこびを、百姓等と共に踊つた、そのなごりの一つであらう。

一つを、どうさいえんぶりゑぼし、或は、義經が被つたので、義經の變へ名藤九郎ゑぼしと呼んでゐる。黑地に牡丹の繪を浮せた、ゑぼしで、金銀五色の紙房がついてゐて、如何にも、大將の冠り物らしく、もう一つは、ながえんぶりと云つて、どうさいより粗末で、裝飾も少なく、田植、稻荷、鶴亀等が描いてある。この方は、辨慶その他の義經の供の者が被つたものだと云つてゐる。

その供の者が、各々五人の百姓の主となり、その主に藤九郎がゐて、その藤九郎の

指揮で、手拍子面白く、耕作の振りを踊つた。

まことに、このえんぶりの舞踊はユーモラスなものである。

一體、義經の主從の中の誰がこんなことが好きだつたか、わからないが、義經が此處へ來る前までゐた一ノ關地方にも、これと同じやうな耕作禮の舞踊の盛んに行はれたあとがある。

花卷の玩具、田植踊りに出て來るあのユーモア、じつに人を喰つたあの被りものもよくよくつきつめて考へると、このえんぶりと同じ技巧であり、その舞踊もほとんど同じことである。

先づ主從の中の華美男舞慶の案出として置いた方が一寸面白さうだ。

神様と墓

和歌山・加太

加太淡島神社の境内に二尺餘りの大墓を祀つた小社があつて、賣店で墓の土偶を求

めて奉納すると、勝負事には必ず勝つと、古來から云はれて居る。

殊に訴訟などには、靈驗いやちこなりと云ふので、附近の人々はこの墓の土偶を懐にひそませて裁判に出たものだ。さうすると必ず勝つ。

但しそこは、神様だから、正直な者にのみ勝たしたに、ちがひないとは思ふが。

この墓は、多邇具久と云つた大國主命の家來なのである。何故祀られてゐるかと云ふと、話は面白い。

大國主命が出雲の國に行かれる途中、海の向ふから、こちらへ不思議な船に、不思議な皮をはいで作つた、衣服をまとつた小指位の神様が、やつて來られるのに出會された。

命は不思議におもはれて、その神様の名をお尋ねになつたが、その神様の聲が小さいので聞えなかつた。

で命は家來である物知りの多邇具久にお尋ねになつた。しかし多邇具久も知らなかつた。そして

「これは多分久延昆古が、存じて居るのでありませう。あれは長年田の中に立つて

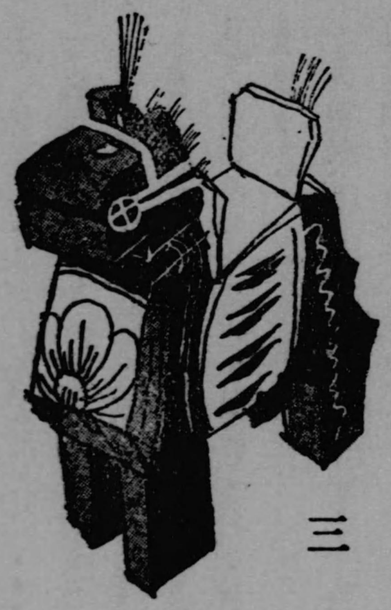
ねて、いろいろな事を見てゐるでせうから」と申し上げたので、命は早速に久延昆古をお呼び出しになつて、お訊ねになると、その小つぽけな神様は、神產巢日之神の御子の少彦名命であることが解つた。

でも、あまりお姿が小さいので、こんな小つぽけなものが、そんなに偉い神様かしらとお思ひになつて、神產巢日之神へ使ひを立てゝ眞僞の程を伺ひ立てゝみたら、

「なにこの子は、予の手のゆびの股から生れた子だ、風體こそこんなにチツポケだが、なか〳〵賢い奴だから、萬事この子を兄弟にして力を併せて國を治めたがよいぞ」と、いふ仰せだつた。

で命も大變よろこばれ、この少彦名命と、お協力になつて、國土の經營にあたらせられた。この二神を結ぶに至つたのが多邇具久であつて、その功蹟を認めてやらなくつてはならぬといふので、多邇具久はあとで神社の横に遷使殿として神に祀られ小墓を奉納するやうになつた。

この話は古事記に出てゐる。話の中に出て來る久延昆古は、案山子の先祖と云はれてゐる。



三　春駒

福島・高柴

田村麻呂が征夷大將軍となつて、東奥に下向したのは、延暦十四年である。

この時京都清水寺の開祖延鎭和尙は、寺內の地藏尊に三七日の祈願をこめて、凱勝を祈つた。その地藏尊が有名な凱旋地藏、またの名鎧地藏だ。その折、延鎭和尙が、佛像の餘材で鞍馬百匹を作り、田村麻呂に贈つたといふ話はあまりにも有名である。

田村麻呂は、その百匹の鞍馬を鎧櫃に收めて欣然として、下向して行つた。そして先づ大瀧山の合戰となつたわけであるが、敵將の大多鬼丸がおもひもよらぬ頑强であり、しかも遠路の疲れから流石の田村麻呂軍の旗色が惡るくなつて來た時、何處から

ともなく、精兵を乘せた百匹の鞍馬が、突如現はれ、敵陣に突進すると見る間に、大多鬼丸の軍勢を粉碎し、大多鬼丸をやつつけて、姿を沒してしまつた。

話は田村麻呂の凱旋の後になるが、その後に高柴の里人が戰場のあとへ行つてみたところ、草叢の中に一匹の木彫の鞍馬が全身に汗をビツショリかいて、頭を垂れてゐるので、不憫におもつてそれを拾つて家へ持ちかへつた。

そして、近所の杵阿彌といふ者に見せたところ、杵阿彌は、延鎭和尙の鞍馬百匹のはなしを知つてゐたと見えて、それを貰ひうけ、九十九匹の鞍馬を作つて、百匹として、家に置いた。ところが三年の後に、その元の一匹が行衞をくらましてしまつたといふのである。

いまの三春駒の親はじつにその殘りの九十九匹の馬なので、天保十一年に記された傳來の言葉によると、これを弄ぶ子は健かに成長し、子無き者は、日々三粒の大豆を以て飼へば必ず子寶を得る。殊に痘瘡、痲疹に利き目があると言ふ。

その構圖がじつにさつさうたるものであつて、その有名さも著しく、手本として小學校の圖畫の敎科書に載つてるほどの傑作である。

便所の神樣

宮城・仙臺

仙臺地方の古風な農家の便所に入ると、しば〳〵、中に棚がかけてあつて、素燒の人形が載せてあるのを見受けるが、これを閑所の神樣だと同地方の人は云つてゐる。

おほむねが、女人で立つてゐるのもあれば、座つた形もある。

閑所は卽ち便所で、こゝで云ふ便所の神樣なのだ。

便所の神樣とは一體どなたなのかわからないが、神樣は女體で、しかも盲目の方であるといふ。

そして、大變淸潔ずきな方でゐらるゝから便所を掃除して上げると悅ばれると云はれるので、同地方へ行くと、何時もきれいに掃除がしてあつて、便壺へ唾などを吐く

ものはゐない。

唾を吐くことは、神様がいちばん厭がられ、それがためには、しば〳〵罪を受けたものがあつたと云つてゐる。

子供はこの神様を便所のおばさんと呼んでゐる。そして、若し下痢して便所へ數度行くやうな場合は、便所の中で、「おばさん、おばさん明後日(あさつて)おいで」と稱へると、下痢が止むと信じてゐる。

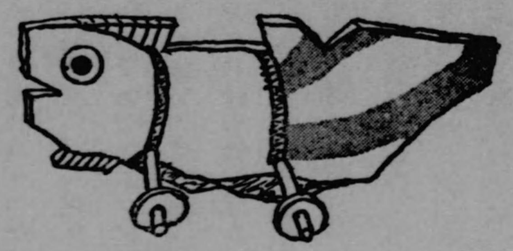
僕等も子供の時分は、よく便所へ行つて、さう云つて賴んだものだ。

平田翁の「玉手襁」の八に「厠を掌給ふ神の名は、古書に此者厠神と載傳たる文は無けれども、世に卜家の神道また橘家の神道など傳ふる人々の說に、埴山昆賣神と水波能賣神なりと云ふは、實に然も有るべく覺ゆ。其はこの二神は土神水神にて、伊弉那美神の御屎と御尿に成坐ればなり」と見えてゐる。

尙便所の神様は、仙臺地方に限つてあるのではない。島根縣の能義地方及び出雲各地にもあつて、それ〳〵便所に祀られてゐるが、これは土人形でなく、唐黍の殼か、或は紙で作つた男女一對の人形で、主に便所の內側の壁に貼つてある。

鯛車

鹿兒島・國分



民謠「鹿兒島オハラ」は可成り有名になつて、遠地の東京の中心銀座街頭に立つてゐても、いまは聽かれる。そのオハラーハの中に出で來る、煙草の國分に彥火々出見尊(火遠理命)を祭つた神宮があり、その門前で、板を切拔いて、彩描した鯛車と呼ぶ雅致のある玩具を賣つてゐる。

これは古事記の中の海幸彥山幸彥の神話に材をとつたものだ。

この兩皇子は、皇孫天津日高日子番能邇邇藝命と木花咲夜媛命との間に生まれた二柱の神で、火照命、火遠理命と呼ばれる方々であつた、兄の火照命は、海幸彥と云はれる如く釣針をもつての名手で、弟の火遠理命は弓矢をもつて山に一度入られれば、

どんな獣でも捕へらるゝと云ふ特技をもつてゐられたので、その名も山幸彦と呼ばせられた。

ところが、或時フトしたことから、その幸を換へられて、海幸彦が山へ、山幸彦が海へ出られてみたが二人とも獲物がなくして、悔いられたことがあつた。その折山幸彦は、獲物が無かつたばかりか、兄神の釣針までも失つておしまひになつたので、兄神の怒を買ひ、御佩きになつてゐた十拳劍を壞はして、五百本の釣針を作つて差し上げたのであつたが、兄神は決してお受取りにならないで、もとの釣針を返せと云つてここにお兄弟での爭ひが起つた。それで弟の命が海邊に出られて泣き悲しんでゐられたら、鹽堆神が來られて、その話をきゝ、同情して、小舟に弟の命を乘せて海神のもとへやられた。そこで山幸彦が海洋へ出て行くと、忽にして舟は海底へ沈み、立派な海神の御殿へ迎へ入れられた。そして海神の娘豐玉昆賣と婚ひなされ、婿君として三年其處にお住ひなされた後、海神の助けによつて魚を集めて、御覽になつたところ兄の命の釣針が鯛ののどにひつかゝつてゐたことがわかり、その釣針を得ると同時に潮滿珠と潮干珠とを、海神から貰つてかへられ、兄上と和解なされた。しかもその二

珠は、じつに尊いものであつて、その二珠によつて兄命の性來の亂暴も改つたといふのである。

その折の釣針を呑んでゐた鯛が即ちこゝで云ふところの鯛車なのだ。

尙この山幸彦即ち彦火火出見尊は、神武天皇の祖父に、また豐玉昆賣は祖母にあたらせられると云はれてゐる。

潮滿珠と潮乾珠

山口・長府

次いでに「潮滿珠と潮乾珠」を書かう。

豐玉姫が、彦火々出見尊に贈られた二つの寶珠は、その後彦火々出見尊が海へ投じてしまはれた。

日本書紀に

「二年七月皇后豐浦の津に泊す、この日如意珠(註、これを潮滿珠潮乾珠と云ふ)を海中に得給ふ」とある。

即ち神功皇后は、その後それを海から拾つてゐられる。

したがつて神功皇后は海から得給ふたその二つの寶珠をもつて三韓征伐に上られたのだ。

そして、先づ群がる敵船を前にして、潮乾珠を海に拋ち給うたところ、潮は俄に退き一面の海が陸地に化したゝめ、三韓の兵は全部船を捨てゝ、陸上戰となつたのである。

皇后は、それを見られて、こゝぞとばかり潮滿珠を拋ち給うた。すると、潮が十方から湧き上り、見る見るうちに幾萬の夷敵が、一人も殘らず浪に溺れ、皇軍は遂に大勝を博した。

下關の忌宮神社の社傳によると「神功皇后御凱旋の後、靈驗いやちこなる潮滿珠、潮乾珠二珠を納め給ふた」と誌してゐる。

で豐玉姫が、彦火々出見尊に贈られた二寶珠は、神功皇后のお手に入り、そして忌宮神社に納つたのだ。

忌宮神社は、下ノ關市外長府町にある。そして、そこで乾珠滿珠の土鈴が賣られてゐる。

和歌山・粉河

粉河の流し雛

「ちちははの、めぐみも深き粉河寺」は、西國三番の札所として誰も知らぬものはない。

同じことで、この粉河から出る流し雛は、またあまりにも鄕玩愛好家の間に、有名である。

昔、河內國澁川郡の長者に、佐太夫といふ者がゐた。この人の娘がある年いたく疱瘡を病んで、どうにもならなかつた。

しかも、一人の愛娘のことゝて、父の佐太夫の心勞は非常なもので、娘の苦しむ有様を見て、じつとしてゐられなかつた。

で、醫者にもかけてはあつたが、粉河寺へ祈願をかけて、朝な夕なに娘の全快をいのりに祈つた。

と滿願の日の夜のことである。

「白い川の流れに、ひたつて、病を癒やせ」といふ神のお告げを夢にみた。

そこで父の佐太夫は翌朝、他人にわからないやうに、白布で娘の身體をかたく包んで馬に乘せ、侍者をも連れず、白い流れを尋ねて家を出た。

そして、いまの粉河までやつて來ると果して、水が白々と清く澄んで、流れて行くのにぶつかつた。そこで父は、よろこんで娘を馬上から降して、その流れの水で髪を洗ひ身を清めてやつたところ、さしもの難澁をきわめた疱瘡が一瞬に全快してしまつた。

で不思議におもつたので、家に戻つてから父の佐太夫は侍者に云ひつけて、河水をしらべさしたところ、川下を一つの紙の雛が流れてゐた。

そこで、これは、粉河寺のお使ひ雛だとおもひ、病の全快のお禮に、娘に敎へて紙雛をつくらせ粉河寺へ奉納させた。

それが粉河の流し雛のはじめだ。その後、この話をきいて近在近隣の女達は、これをまねて、病氣にかゝると、紙雛をつくりその雛に病氣を負はせて粉河に流した。

すると、不思議にも病氣が全快した。

天狗の面

各地

鼻の高さ七寸、脊丈は七尺餘、口が大きくつて、眼が八咫鏡の如く輝かしく赭色の顏を猿田彦命はしてゐられたと、日本書記に書いてあるが、各地にある天狗の面は、實に其通りで、猿田彦のお顏を模したものだらう。

筠庭雜錄には「假面には胡德樂のおもて鼻大なり、又王の鼻とて神社にあるは、猿

田彦のおもてにて、此面命の作りざまは天狗の假面なり」と、出てゐる。

昔から祭禮の神輿の渡御には、必ずその行列の先頭には猿田彦になぞらへた、天狗の面をつけたものが出る。

それは、天孫降臨のみぎり、それを地界で察知せられて、途中雲上まで、出迎へられた猿田彦命になぞらへたものであらう。

おかめの面

おかめは、天宇受賣命である。

さうすると天宇受賣命は强氣なお方だつたが、大變に愛嬌のあるやさしいお方と云ふことがこの面によつてうなづかれる。天孫降臨の折に、猿田彦がそれと知つて途中まで出迎へられた時、他の命等は猿田彦の異形なおすがたを見て、皆怖れて、近よることが出來なかつた。その時、敵か味方かを單獨で、近よられて、問ひたゞされたのがこの命だつた。

その時命は、胸乳をかきたて、裳帶を臍の下に押し垂らし、破顏一笑、立ち向はせ給ふと書いてある所を見ると、すこぶるモダンな女傑で居らせられたらしい。

この命にはもう一つ大切な話がある。

それは有名な事件で、例の天の岩戸の際だ。

素盞嗚尊のあら〳〵しい御行狀を怒らせられた、姉君の天照大娘は遂に天の岩屋に身をかくされてしまつた。したがつて世の中は闇黑となり、萬の惡神共がしめたとばかり跳梁し出した。そこで、八百萬の善の神々が、天の安河の河原に集られて、大神を岩屋からお出しする方法を評議された。その結果、天宇受賣命に舞をして貰ふことになつた。

命は、葛羅をば褌にして、小笹を手に持たれて板を踏み鳴らし、踏みならし、胸乳や股をあらはに、尻をふりふり、躍り狂はれたと云はれる。その舞が餘程おもしろかつたと見えて、八百萬の神々は聲をあげ、手をうつて、どつと笑ひくづれた。

大神は岩戸の内で、これはをかしいなと、思はれて岩戸を細目にチョッと開いて、覗かんとなすつたところを引き出され給うた、そのお手柄話である。

おとん女郎

鳥取・鳥取

どこにも狐に誑された人の面白い話があるものだが、このおとん女郎といふ狐は、人を誑して、キツと頭をツルツル坊主にしたといふ床屋さんの祖先みたいなお狐様だつた。

したがつて、娘はおろか人間と名のついてる者共は、そのツルツル坊主になることを厭がつて、因幡の立見峠を越さうとするものがその當時にはなかつた。

ところが、どう吹いた風のふきまはしか、立見峠の部落に、若い勇士が二人も出現して、庄屋の酒宴の席上、必ず退治して見せるとりきみ出し、宴がすむと、二人がそ

ろつて、峠へとび出して行つた。

峠へ來ると、果して黄金色の古狐が、ぶらりぶらり歩いてゐたが、この二人を見ると若い女に化け、そして路ばたの石地藏を抱き上げ、川の水草をつけると赤兒になつたのを、脊中におんぶして、向ふの方へ歩いて行つた。

二人はよろこんだ。そしてその後をつけて行くと、その女は一軒の家をたゝき起して老人夫婦にその兒を渡すとみると、夫婦は、孫だと云て、その石地藏を抱き上げてはしきりに喜んでゐる。そこで二人は、その夫婦に今見て來た話をきかせて、それは、ほんとの赤兒でなく石地藏だと云つてやつたら、その老人夫婦は眞實にしなかつたばかりか、反つて二人の言葉を惡意にとるので、二人は、そんなら赤兒を釜で煮てみろと言つてやつた。

さう言はれるので老人夫婦は、そこまで言つて呉れるんなら眞實だらうと、早速釜に湯を沸して赤兒を、かうしてやると投げ込んだ。しかし矢張り、それはこゝの夫婦の思つてゐた通りの孫であつて、遂にうだつて死んでしまつたので、夫婦は火のやうになつて怒り、二人を役人に訴へてやるといひ出した。

二人は、かうなると驚いたが、いまさら赤兒を殺させてしまつてからでは仕方がなく百方詫びたが、夫婦は一向に、そんな詫び言などに耳をかさなゐので困つてゐると、そこへ和尚さんが通りかゝつた。そして、その話をきくと、あはれに思ひ老夫婦に詫び、二人を今道心として、剃髪させて、お孫さんの菩提を永久弔らはせるといふ約束をして、引取つて呉れた。

よろんだのは二人の若者だつた。狐どころか人間を殺したといふので、その和尚さんの寺へつくと、早速剃髪をして貰ひ、一心に佛前に禮拜して、木魚を鳴らして經を上げてゐた。

そんなことゝは知らないのが、庄屋の酒宴で一緒にゐた連中だつた。夜が明けても二人共歸つて來ないので、さそひ合はせて、翌日、立見峠に來てみると、なんと二人の若者は、ツルツルの坊主となり、竹串に馬糞を貫いたものをうや〳〵しく捧げて、草叢の中に坐つて、何か云つてゐるではないか。

二人ともおとん女郎に誑されたのだつた。

そのおとん女郎は、今は黄八丈の着物に麻の葉しぼりと黒繻子の鯨帶をだんだらり

と結んで、しかも手拭まで被つた姉樣姿の起上りに化けたまゝで玩具となつてゐる。

この姿はおとん女郎の晩年の姿で、その後江戸に出て女郎になり、ザンゲの生活をしてゐた時代の風姿だと言はれてゐる。

譽田の埴生馬

大　阪・古　市

飛鳥戸部の田邊史伯孫が、初孫の顔を見に、娘の嫁いだ先の古市の町からのかへり途、譽田陵の側まで來ると、前の方に立派な駿馬に乘つた男が、馬をいそがせて行くのに出會つた。

由來この史伯孫は大の愛馬家で、したがつて乘馬自慢の男であつたので、その悠々たる乘馬振りを見ると妙に癪にさはつた。かて〳〵加へて今日は、また初孫に逢つて、その上多少酒の醉もまはつてゐたといふ上機嫌の時だつたから、一層にその自負も强

く高く、一つ、前の男を追ひ抜いて眼に物見せてやらうと、ビシリと馬に鞭をあてると共に馬を馳けさせた。

しかし意外なことに、史伯孫の馬が駈け出したとたんに、前の男の馬も馳け出したので、史伯孫は全力をあげて、わが愛馬を鞭うつて、追ひ抜かうとあせつたが、どうしても追ひ抜くことは勿論、その馬と馬との距離さへも縮めることが出來なかつた。

で終には史伯孫も根負けしてしまひ、あんな駿足の馬に一度俺も乘つてみたいと、しめた手綱をゆるめて、今度は、しづかに前の馬のあとについて行き出すと、前の男は史伯孫が競爭を思ひ切つたのを見てか、急に馬を止め、ヒラリと馬から降りて、史伯孫の追ひつくのをニコ〳〵して待つてゐた。

そして

「おまへさんは却々馬がお好きらしいが、お所望ならば、この馬と取り換へて信ぜようかな」

と言つた。史伯孫は、これは夢ではないかと非常に喜んで、早速自分の愛馬と取替へて貰つて、その駿馬にまたがり空とぶやうに、家に戻つて來て、厩に繋いてその晩は

寢てしまつた。

その翌朝、史伯孫は明るくなるのを待ちかねて、厩へ行つてみると、これはまた何としたことか、昨日の駿馬が土の小馬に變つてゐた。

驚いたのが史伯孫だつた。

どうもこれは不思議なことだと、昨日の男に逢つて話してみたらわかりはしまいかと、その土の馬を曳いて、早速に昨日男に逢つた譽田陵の側まで來てみると、そこには澤山の土の馬がころがつて居り、そのそばに自分の愛馬が頭をさげて、うら悲しさうにしよんぼりと佇んでゐた。

史伯孫は、その光景を見るとたまらなく自分の馬がいとしくなつて來た、そしてそれと同時に、大事な自分の愛馬と土の馬とを慾にかられて愚かにも交換したことを悔い、その場から愛馬を連れてかへり、前よりも一層大事にした。

そして、その馬が齡つきて死んだとき、立派な塚を建てゝねんごろに弔つてやつた。その時の供養の馬である。

善知鳥

秋田・外ケ濱

人皇十九代允恭天皇の御宇に、勅勘を蒙つた烏頭中納言安潟は、この地を終生の地とさだめて、外ケ濱べりの湯の島に庵を結んで、宗像の三女神を祀り、しづかに瞑目してをつた。

その後のこと、どつからともなく、この湯の島の海岸に一番の鳥が飛んで來て、夜晝となく、うとう、やすかたと啼くのであつた。

ところが、ある時一人の獵師が、その雄を捕へてしまつた。すると雌鳥はそれを悲んでか、日夜、やすかた、やすかたと啼きまはるので困つたが、そのうちに獵師は非業な病に倒れてしまつた。

里人は、それを見て、怖れて塚を立てゝ、その雄鳥を祀つた。

後、その話が遠く傳はり、京より勅使が下つて、三角相といふ桶へ、殘つた雌鳥を

捕へ入れて、もちかへつて大神宮に奉つた。

これは、その善知鳥の土偶笛であつて、土鈴と共に、縣社善知鳥神社から、小兒の蟲封じの禁厭として授與される。

吹けば、ほう〳〵と寂しげに鳴く。

桐原の藁馬

長野・相原

信州水内郡相原を桐原の邑と昔の人が呼んだのは、こゝはいちめんの梧桐の原野だつたからであつて、それとその名を特に大きく呼ばしめたのは、この原野から、ときどき名馬が野馬にまじつて出現したことによるのだ。で往時は、馬といへば桐原の駒と一口に人が云うた位だつた。

人皇十三代、成務天皇の御宇に、またしても名馬がこの桐原に出現した。この馬こ

そは、いまゝでには出なかつた程の龍馬であつたので、、邑の長は、それを捕へて遠く近江の志賀郡に奉獻した。

逢坂の關の岩かど踏みならしやま立ち出づる桐原の駒　　大宰大武高遠

あふ阪の清水にうつる影も見ず關路隔つる桐原の駒　　源　義　將

これ等の歌が、その馬のために詠み殘されてある位だから餘程の龍馬にちがひなく、天皇には、邑の長に對して品々の引出物をされて、よろこばれた。

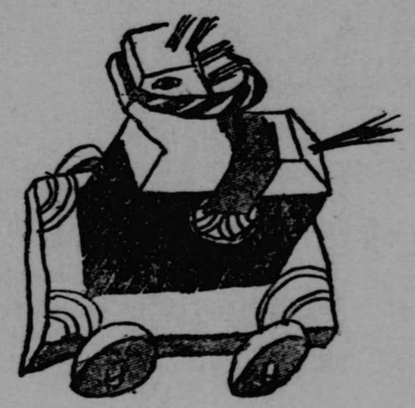
この龍馬は天皇が崩御されるとまもなく居なくなつてしまつた。

そして人皇三十三代推古天皇の御宇に曾我の領地である甲州に出現したところを、曾我の者が再び捕へて聖德太子に獻じた。太子はこの馬に乘られて、七日の間空中を飛行なされたことを、太子傳記に書かれてあるが、太子崩御の節、御葬禮に供奉して御廟前で死んでしまつた。

藁馬はこの龍馬にかたどつたもので、例年の三月八日の相原神社の祭禮に授與される。

ちやぐちやぐ馬こ

岩手・盛岡



むかし、或所に長者殿があつたが、いたつて無慈悲な男で、人馬を虐使することなどは、屁とも思はなかつた。ある時御駒神の神靈が馬體をかりて、この長者の虐使をうけて居たが、五月の節句が來ても、當日は人馬を休ませなかつたので、この靈馬は暴れ出し疾風の如く馳け去つた。

村の人々は家外に出て、あれよ、あれよと云つて止めようとしたが、手のつけようがなく、その馬の馳けて行く先を遠く見守つてゐると、馬の脊上に一異人が立つてゐるのが見えた。

その馬は鬼越の土地まで行くと立つたまゝ絶命した。

人々は、その一異人こそお蒼神様のお神體であつたと知り、そこに蒼前社を建て祀つた。

五色の美しい長い布で盛裝させ、ちやぐちやぐ鳴る鈴をつけた馬を引いて、五月の節句には、盛岡近在の村の者達は、こゝへ詣つて、馬神に幸運をねがふ習ひが、その後誰とはなしにはじめられた。

このちやぐちやぐ馬子は、その日に蒼前社に詣る盛裝の馬をかたどつたものである。

夜叉神面

東京・麻布

麻布區笄町にある長谷寺の境内夜叉明王堂に奉納する張子製の隈取面であるが、この面を堂より借りて祀れば、顔に出來るおできは、どんなものでもたちどころに癒る

といふ有難い面である。

源義朝の臣澁谷金王麿は源家にとつては忘れることの出來ない功蹟をもつた人で、この人の話は、愛知の野間の木太刀のところにも出て來るやうに、はなはだ豪傑風な人であつた。

その金王麿が長者丸といふ地に築城したとき、城の北隅へ地狂叉を石に刻し、鎭地神として埋めた。

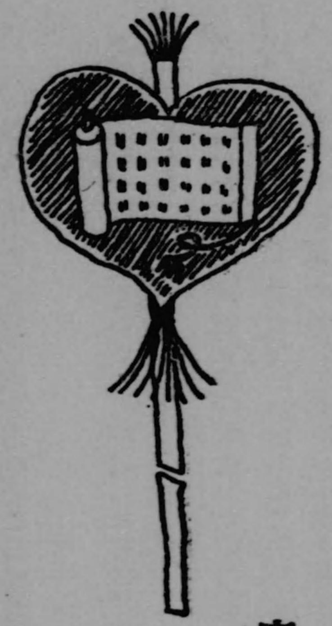
その後江戸の末期、阿部豐後守に仕へた安川繁成が、この地を拜領、住居としてゐたが、たま〳〵井戸を掘ると土の中から、件の金王麿の埋めた地狂叉が出て來た。

繁成は、鎭地神とはゆめにも知らなかつたので大切に、保管してゐると、毎晩のやうに金王麿が夢に現れるので、これは祀れと云ふのだなと思つたので、長谷寺に奉安したのが、この面の澁觴である。

この金王麿の正體は、不可解とされてゐるが、金王麿は後に澁谷姓を賜りし、從五位下に叙された河崎重家の一子で、澁谷八幡の靈示によつて生れた。永治元年八月十五日がその出生の日で、金剛夜叉明王の化身なりといふのが、その時の靈示だつたの

で上下の二字をとつて金王丸と名づけたと云はれてゐる。金王丸が金王麿に變つたのは、保元の亂の功によつて義朝から貰つたのである。

義朝の死後、金王麿は、都にかへり義朝の妾の常盤のもとに、義朝最後の光景を知らせてゐる、その後出家して、しばらく澁谷の親王院の傍に庵を結んで、菩提を弔つてゐたが、亂乎として、その後のことはわからなくなつてゐる。



唐招提寺の團扇

奈良・都跡村

この團扇は、火除、雷除、安產の禁厭となり、田畠に立てゝおくと害蟲がよつて來ず五穀豐穰、扇げば病人の苦熱を散ずるといふ有難い團扇で、奈良の生駒郡都跡村の唐招提寺で、毎年五月十九日に鐘樓から、老若男女の善人達へ撒き與

へるものだ。

何故毎年五月十九日と日をきつて、こんなハート型の可愛いゝ紙張の支那團扇を撒くかと云ふと、この日は、この寺を盛んにした大然莽和尚といふ人の忌日にあたるからだ。

この人は覺盛と云つて前後不出生の傑れた和尚さんで、この和尚さんが生れてゐなかつたら、天平の昔、聖武、孝謙の兩帝の勅願によつて開基された由緒あるこの寺も荒廢して、いまごろは臺石ばかりとなつてゐたかも知れないのだ。

事實、この傑僧が來たときは、この寺は、草ぼうぼうとして、殆んど誰一人顧みる者さへ無いといふ荒廢ぶりだつた。

由來記は、「戒律宗の中興大悲菩薩夏中禪室に座し給ふに、蚊虻の群り來りて菩薩を刺す、然るに少しも之を拂ひ給はず、弟子のもの團扇を以て之を追はんとすれば之を制し、我は菩薩六波羅密中の檀波羅密(ものを施す)を行せりと仰せらる」と書いてゐるが、實にそんな風な脫俗の僧だつたので、心服し歸依して來る者が、非常に多く、したがつて、かくすたれかゝつたこの寺をも立派に、中興することが出來たのだ。

この蚊軍猛襲の折の故事にならつて、傑僧の大徳をこの團扇によつて、善男善女の心へ撒くのである。

傑僧の大悠大悲の有難きシンボルである。

米内の獅子頭

岩手・米内村

米内村は盛岡在で、ここの土地に米内の權現又は米内藥師とも呼ぶ社があり、社からこの獅子頭をかりて來て、自分の志望を祈願すると、社に祀られてゐる山伏のこゝろを通して一生のうち一度は必ずその志望が達せられると云ふのだ。

この山伏といふのが、もとこの米内の不來方山に、何時とはなく來て住んでゐたのであつたが、南部家でこの山に城を築かうとしたら、どうしたわけか、それに反對をして築かせようとしないので、いろ〳〵と人をつかはし、手をかへ品をかへて騙して

この山からおんだし、遂に殺してしまつた。ところが、殺させたその夜、その山伏が南部家のお城に來ていろんな業をして呪ふので殿様は、中津川の上流に祠を立てて、權現として祭つてやつたのがこの權現様だ。

しかし、山伏はよほど心臓の強い男だつたと見えて、祀られたお堂もろとも一夜のうちに、城の方へ臀を向けて、後向きになつてゐた。人々は驚いて向き直すと又忽ちに一夜のうちに後向きになつてゐた。そこで、殿様も家來も、その剛情さにあきれて好いたまゝにさせて、いまはある。

この山伏の強い心臓が、この獅子頭に乘り移つてゐるのだ。

オシラ様

青森縣・青森

昔、或所に百姓の爺様夫婦があつて、美しいお小夜といふ一人娘をもつてゐた。

そして又厩舎には、立派な葦毛の馬を飼つて居た。その娘が、毎日のやうに厩舎に行つて、何か馬と話をしてゐたやうだつたが、年頃となると馬と夫婦になつてしまつた。

父親は、それを知つてひどく怒り、ある日その馬を曳き出して、山畠へ連れて行つて、大きな桑の木の枝に釣るし上げて殺した。そして、皮を剝いてゐるところへ娘が來て見て泣いて居た。

するとその皮が、父親に剝ぎ上げられると、側に泣いてゐた娘の體の方へ行き、グルグルと卷き着いたかと思ふと、泣いてゐた娘諸共天へ上つて行つた。

爺樣夫婦は、さうなつてみれば娘のことが案じられて、毎日毎夜泣いてゐた。

すると或夜夢に娘が來て

「トトもカカも決して泣いてくれるな、オラは生れやうが惡くて仕方がないので、あゝしたざまになつたのだから、どうかオラのことは、あきらめてクナさい。その代り春になつて、三月の十六日の朝マ、夜明けたら土間の臼の中を見てクナさい。臼の中に不思議な馬の頭の形をした蟲が、ズツパリ湧いて居るから、それを葦毛を殺した

桑の木から葉をとつて來て、飼つて置くと、其蟲が絹糸を作りますから、トトもカカもそれを賣つて生活してクナさい。それはトトコ(蠶)と謂ふ蟲で世の寶物だから」と言つた。

爺樣夫婦は不思議な夢もあればあるものだと思つて居たが、三月十六日の朝になつたら、はたして臼の中に夢で娘が云つた通りの、馬の頭の形をした蟲がいつぱい湧いて居た。そこで山畠へ行つて桑の木の葉を採つて來てかけると、よく喰つて繭をかけた。

これが今の蠶の始まりであつた。馬と娘は今のオシラ樣となつたのである。

これは、馬頭と、姫頭の二體で出來てるものであるが、二體とも棒に、きんきらの錦地をやたらとくつゝけて、金の冠を被いだ、何が何やら正體のわからないが神樣らしく造つてある。

古賀の馬乘猿

長　崎・古　賀

唐の伯樂は、馬の醫術にかけては、天下にならぶ者がなかつた。それ位の人であつたから、また馬を見る眼もするどく、名馬を持ち、よくそれを愛しもした。

ある日のこと、伯樂が野を歩いてゐると、一頭の猿が、野生の馬に乘つて、野を八方に馳せては、キキと戯れてゐるのを見た。

見るとすばらしい名馬に猿が乘つてゐる。で伯樂は、即座にその名馬が欲しくなつた。

そこで一計を案じて、木を伐つて木馬を造り、それに自分の被てゐる上衣をかけ

て、きれいに飾つて、木につないでおいて、猿に交渉して、交換して呉れないかと申込んだ。

ところが、猿はその木馬を見ると、きれいなので大いに喜んだ。

そして、伯樂が、あとになつて異議を言はない印だと言つて、とりだした山芋を二つに折つたのを貰つて、伯樂にその野生の馬をゆづつてしまつた。

伯樂は、馬に乘つて遠く馳せ去つた。

猿は、木馬に乘り鞭をあてたが、木馬は動かなかつた。

それで、はじめて欺されたと知ると、猿は涙を流して一晩中野原で泣き明かしてゐた。

古賀の馬乘猿はなんとなく淋しく見えるのは、そんな發生の故か、曠野のなかに、とりのこされたやうな寂しさはある。

笹野才藏

福岡・博多

ある夜、窓口から妖しい曲者が忍び込まうとしたので、一刀のもとに切り捨てゝしまつた。切つたのが笹野才藏で、切られたのが疱瘡神だつたのだ。

さあ、この事件が町に傳はると、笹野才藏の豪傑の名はいよ〳〵高まり、町人等は笹野才藏の姿を紅で紙に刷り込んで、家毎に門口へ張り出した。

何のこともない、かうやつて疱瘡神を切つた豪傑の姿を出して置くと、怖ろしい疱瘡の魔神が、家の内へ入つて來ることが萬あるまいといふ寸法だ。

ところが、その寸法が當つて疱瘡神が、その後入つて來なかつたと言ふ話だ。でいまも、その寸法を昔のまゝ筑前一帶の人が踏襲して、嚴として守つてゐる。

その豪傑を人形にしたのが土偶笹野才藏である。はでな若衆姿で、しんとんとろりと油壺から拔け出たやうな好い男まへで、猿を連れてゐる。

この豪傑は、山王様をヒドク信仰してゐた。そして山王の使者が猿であるといふので、常に、猿を連れて歩いたといふのだ。

山王様の信仰は餘程ふかゝつたのだらう、我は愛宕の化身也などゝ、しまひには自身が山王様になつてしまつてゐた。

この豪傑はどんな人かと言ふと、「可兒才藏吉長は、葉付の竹を指物として、度々功を現したる故に、笹の才藏と世には申せし。幕の紋は篠に蟹也」（白石先生紳書）と書いてある。

美濃の人で、福島正則にしたがつて、關ヶ原の合戰に出て、敵の首を十七も上げてそれを、笹に結へて、肴負つて、戰場を荒らしまはつたといふ武者男だ。

また笹の才藏といふ名は、關ヶ原のその奮戰の光景を眺めてゐた徳川家康が、おくつたのだと言ふ。

笹野才藏が死んだのは、慶長十八年六月で、六十歳の時だ。

新田神社の矢守

東　京・矢　口

延文二年十月十日の朝、新田義興主従を乗せた舟が、多摩川の矢口の渡頭へかゝると、船頭達が慌てゝ川へ飛び込んだ。

それを合圖に、岸からばら〳〵と驅けて出たのが、江戸遠江守一黨で、四五百騎物の具に身をかためてゐる。

義興が欺かれたと思ひついた時は、すでにおそく舟底の栓が全部拔かれた後で、水は遠慮なく、舟へと溢れてゐた。

義興は齒がみして口惜しがつた。

「この一念、惡靈となつて祟りをなさでおかれやうか」

と叫びざま傾く舟の緣に突立ちあがり、太刀をぎらりと拔いて、左の脇腹から右の

あばら骨まで搔き切つて死んだ。從ふ十三騎の者達もこの光景をみて、われも〳〵と刺しちがへ、或は自分で自分の首を刎ねて死んで行つた。

遠江守の用意の舟がくり出された。大網をおろして、義興の死骸を誘ひ入れると、首だけを持つて、入間川の足利の本陣を指して、遠江守が引上げて行つた。その義興が祟つたのであらう。同じ月の廿三日の日暮れ方、江戸遠江守は、多摩川稻毛の領地で、祝宴を張つてゐるところへ、不時の出水に遭つて死んでしまつた。

新田神社は義興が死んだところだといふが、實際は、死んだのが上流の矢の口で、死體の漂着した場所なのだ。

例祭は毎年十月十日で、矢守は當日神社より出される。

なまはげ

秋　田・男鹿半島

大蛇の化身八郎が、南祖坊の法刀に破れたといふ十和田湖の物語は、ついに八郎が

秋田に逃れて八郎潟の主となつて終つてゐる。

その八郎潟を抱いた男鹿半島の南の海岸登山口に五社堂といつて五匹の鬼が祀られてゐるが、この鬼共は往古漢の武帝が、この本山に渡來したとき連れて來たものださうだ。

それは、陰暦正月の十五日の夜、この近村で行ふなまはげの習慣に、近村の青年達がかぶつて出る面のやうな、おつそろしい青と赤い顔の鬼ではあつたが、よく武帝のためにつくしてくれるので、武帝もそのこゝろを愛しんで、正月十五日の夜だけは、その鬼共に暇を出し、近隣の村里へ出て、欲するものを自由にとつてよろしいと、有仰つてゐられたのだつた。

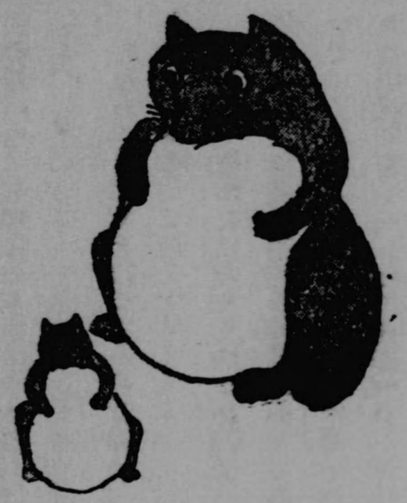
でその夜は、くらくなるのを待ち構へて、彼等は、雀躍して山を、いつさんにかけおり、足ぶみならして、町家に現れ來ては、欲しいとおもふものを主人にねだりとつて歩いたものだ。

が一方町家の者達は、たつた年に一度のことであり、しかもこの鬼共は、さうも人身に危害を加へるといふやうなことがなかつたので、しまひにはその鬼共に親しみさ

へもつてその夜を待ち、所望する物々を與へるやうになり、その鬼の平素の勤勞をねぎらふやうにまでなつてしまつた。

そして、その風習をとつてなまはげ、すなはち怠け者をこらす日として、鬼共の死後も續けるやうになつたのだといふ。

このなまはげは、その夜に出現した鬼の姿をとつた土偶で一寸五分位のものである。



柳森の親子狸

東京・神田

じつに可愛いい親子二人の豆狸で、脊中に「福壽」といふ二文字を脊負つてゐる。親子共黄いろな腹を出して、キョトンと夢

幻の世界にでも生育して來たやうな顔をしてゐる。花園の狸とでも云つた方が適切かも知れない。

おそらく、腹鼓を打つてるのを聽いたら、尙いとほしくなつて、ふところの中へ深くねぢこみたくなりさうだ。

しかし、それにはあまりにこの親子狸は、有名であり、もつたいなさすぎる。この親子狸は、無盡相場師の神様だからである。

で、その世界へ入つてゐる者に聞いたら、大變なもので、あつ、神田柳原の土手にある柳森稻荷の「おたぬき様」ですかいと、様といふ字までつけて尊崇されてゐる。何故かといふと、この「おたぬき様」に頼んだら必ず相場に勝つからだ。

社記によると親狸は壽、子狸は福を授けると書いてゐる。

さう云へば、この親子が詩的な表情をしてゐるのも道理で、救はれる中には、花園を荒らす有名なブルの詩人もゐる。親子はもと現在の松枝町と東紺屋町の邊にあつたお玉ケ池に住んでゐたものだといふことである。

何故、人間の婆婆に手をさしのべて、相場師を救はなければならないかは、そこが

狸で、腹の中は筆者にもわからない。

建前雛

宮城・仙臺

名大工それがしは殿様から御殿の建前を云ひつかつた。

ところが工事はどんどん進んだが、ある一ケ所にくるとどうしてもうまく仕事が運ばなくなつてしまつた。

名大工もこれにはほと〳〵と案じ果てて、日夜苦しみ續けた。

娘は父の苦しんでゐる光景をみかねて、ある日、父に何を苦しんでゐるのかと訊ねたら父は、これ〳〵しか〳〵で困つてゐると話した。すると娘はかうなさいませといふので、その通りにしたら見事に御殿が出來上つた。

御殿が出來上ると大工は、娘に教つたといふことが世間に知れることを怖れた。そ

して非道にも娘を殺してしまつた。

なんといふ暗黒な世界であらう。その後この事情を知つた人々は、娘に同情して、父子鏃をつくつてねんごろに弔つてやつた。

淨願寺の禿さん

香川・高松

狸の兵隊さんと聞いたばかりでも面白くなる。これは狸のまさしく上等兵殿であつて、肩に黄色の三つの星がついて居り、しかも觀兵式に出るとき被るやうな鳥の羽毛のついた立派な第一禮裝用の帽子を被つてゐる。

この狸は、通稱淨願寺の禿さんで通つてゐた高松市の五番丁にあるお寺に棲んでゐた禿狸の化け姿なさうだ。

明治三十七八年と云へば、未だ記憶になま〳〵しく殘つてゐる人が約過半數もある

だらうと思ふが、日露の戰爭があつた歳で、わが國民は祖國のために國を擧げ、家を擧げて、滿洲の曠野を舞臺として、露軍と戰つた歳だ。

天皇は、そのため廣島まで、大本營を進ませられた激しさで、銃後の老幼男女は、したがつて興奮の頂上にあつた歳だ。

それを察してか、全國の神社の御神馬や、鳩まで、ひそかに滿洲へと戰ひに出た。この淨願寺の禿さんも、その護國のために出征した一人だつたのだ。

そこは術をもつ古つはもの〻禿さんだけに、その働きぶりも榮えたもので、あるときは、大軍團に化けて、露軍を惱まし、またあるときは坊主に化けて、病人に灸をすえたり、病をなほしてやつたりした。

いまは、そのために白禿大明神として祀られ、淨願寺の境内にしづかに眠つてゐる。

迦葉の天狗面

群馬・池田村

迦葉山の彌勒寺に一人の美はしい雛僧がゐた。名を中峰と云つて、利潑で立居振舞も他の雛僧と變つて謹嚴なところがあるので、天巽禪師はひどく可愛がつてゐた。

また中峰も禪師を深く思慕して、禪師と〻もに布敎に傳道につとめた。その效があつて彌勒寺も非常に繁榮し、伽藍の造營まで出來るやうになつた。

その間約四十年もの努力だつた。そこで天巽は大盛禪師に彌勒寺の相續を讓つた。

その時中峰は二人の前へ姿を天狗の姿に改め、「われ迦葉の化身にして、已に權化の業を了せり、自今上天して末世の衆生を拔苦與樂せしめん」と別れを告げて、案山ケ峰から昇天して行つた。

迦葉山の天狗の面は、この中峰尊者の顏をかたどつたものだ。

河童竹

福岡・久留米

久留米あたりまでやつて來ると、さすが本場だけに、河童も福太郎といふ、およそ緣起のい〻、可愛い〻名でよばれてゐる。

そしてレツキとした水神として、東京の本家であるこゝの水天宮と同格に祀られ、河海を渡る舟人を守護し、且つ安產、火災、疫病除けといふ尊い役目を司つてゐる。

したがつて、福太郎の同格であるところの水天宮では、いろ〳〵とこの福太郎に關した玩具を出してゐる。

なかでも愉快なのが、この河童竹だらう。一匹が上向けに、一匹が逆さまになつて下がつてゐるのは、「上半月ヲ口舌ニ下半月ヲ己腹ニ省ミ頭腦ニ心シテ肢ヲ胖シタル」型なんださうであるが、ひらつたく言ふと、河童の上半月は頭を上にし、下半月

は逆になつて泳いでゐるといふ習性の型をとつたといふことになる。

それと竹筒と米飯の包みを吊つてあるのは、河童が、それをみて、この土地の人間共は、飯を喰ふのに、竹といふオツソロシイ硬いものを一處に喰ふのだと思はせるためだといふが、竹筒をボリボリかぢる人間があつたら實際河童は吃驚して近よるまい。

「甲子夜話」によるとこの福太郎が姿を娑婆に現はしたのが、相州金澤村の漁村重右衛門の家からで、享和元年五月十五日の夜、重右衛門の妹の夢枕に出現して、我この家に年久しく祭らるれ共、未だ能く知るものなし、願くはわがために一社を建て給ふべし、然らば水難疱瘡痲疹の守神として擁護あらんとおごそかに傳へたのが、そもそものはじめだつた。

そこで驚いた妹は、さつそく親類にそのことを告げて集つて貰ひ、家に代々傳つて來た水難疱瘡のまもりと誌してある、古箱を神棚から降ろして、開いて見たところ猫のやうな顔の、四肢に水かきをもつた、頭のテツペンが凹んだ異形なものが入つてゐたのだ。それが、この福太郎の本體だつたといふことになつてゐる。

齋藤實盛

山口・美濃地方

齋藤實盛も藁人形にされてはみじめである。

しかし弓矢を持つてゐる。太刀も佩いてゐる。がそれが馬に乘せられて、太鼓、法螺貝といふ鳴物入りで、武士ならで百姓共に村境から、追んだされるのだから尙更みじめだ。

かの篠原の戰ひは、齋藤實盛にとつては、おもひでの戰ひであり、且敗けてもさう口惜しい敵手でもなかつたと思ふのに、事實、實盛は恨みを深くのんで死んで行つたといふのである。

そして「サバヘ」といふ害蟲に羽化して翌年から、篠原はおろか、いたるところの田畑に現はれて、暴威をふるつて百姓共をいちめまはつたといふのである。

その偶像が、村境まで送られる。

齋藤實盛は、あはれにもみじめである。

サネモリオクリといふ藁人形は、その人形をまねて作つたものだ。

吉野藏王堂の蛙

奈　良・奈　良

白河天皇の御宇に、吉野大峰に參る修行者の中に交つてゐた惡人が、行者を嘲笑したところが、どつからとなく急に風が卷き起つて、アレヨ〳〵と言ふまに、鷲の窟のてつぺんへ吹き上げられてしまつた。

いくら惡人でもこれには流石に閉口し前非を悔い、涙をながして泣いてゐた。

そこへ竹林院の老僧が通りあはせて、大變かはいさうに思ひ、蛙にして降ろしてやつた。

そして、藏王堂に連れて行つて修會の上、これから惡行をしないと誓はせて、人間の姿に還してやつた。

善光寺布引牛

長　野・長　野

下野國作久山に、因業な老婆がゐたが、この老婆の因業ぶりは、なか〳〵物すごく强慾一點ばりで、慈悲も容赦もないところから、作久山近在では誰一人相手になるものがなかつた。

ある日、その老婆が、白布を洗濯して庭前に乾かして置いてゐると、何處から入つて來たか、大きな黑い牛がノツソリと庭へ入つて來て、その白布を角にひつかけて逃げようとしてゐるので、老婆は、家內から飛び出した。そして、驚いて逃げる牛の尻を追つて、追ひかけ、追ひかけて、大きな寺の門前まで來ると、當の牛の姿が消えて

失くなり、佛の御光によつてゐすくめられてしまつた。この佛こそ、有名な善光寺如來だつたのだ。そこで、この老婆も、佛の威光におどろき、佛心をはじめて起し、佛信者となり、安泰な餘生を送ることが出來た。

「牛に曳かれて善光寺詣り」とはこれだ。

奉公さん

香川・高松

おまきといふ顏はみにくいが、こゝろねのいたつて優しい子供が、お姫樣の側女に上つてゐた。

ある時のこと、お姫樣が病氣になられたが、どうしたものか、なか〳〵おなほりにならなかつた。おまきは、大變心配さうにしてゐたが、やがてお姫樣の病氣を身にうつしうけて、離れ小島に、流し人となつて行つた。そしてお姫樣の身がはりに死んでしまつた。

そのためにお姫樣は全快した。時の人々は、その話を知ると、誰しも、おまきを、奉公さんと呼んで、そのやさしい心根をあがめないものが無かつた。

おまきは、人形にまでなつた。そして子供が病氣をすると、このおまきの奉公さんを買つて、わが子にいつたん抱かせてから、海へ流して、お姫樣とおまきの故事にあやかつた。するとおまきのこゝろが通じてか、いまだに妙に病が全快する。

奈良法華寺の犬守

奈良・住保村

場所は奈良市外添上郡佐保村にある法華寺であるが、この寺は日本總國分尼寺で尼寺としての名寺であつて、本尊の觀音は、この寺の開基である光明皇后の御姿をうつしまゐらせたものだ。

この光明皇后は、御仁心厚く、天下泰平を御願の下にこの寺を建立された。

犬守は、萬民の急難病苦をお救ひになるため、お手づから山土をもつて作られたもので、そのために皇后は法華經を讀誦し、淨寫なされたといはれる。

今尙比丘尼達がこゝで作つてゐる。この犬は、安産の守、疱瘡除、小兒の夜泣止めの禁厭として名高い。

永平寺の豆太皷

繼　井・永平寺

繼子いぢめの傳說の中に、大禍をお地藏さんに上げさせて置いて、お地藏さんが喰べたらゆるしてやると責めさいなむだ話があるが、これはまた煎豆を畑に蒔かせて、芽が出ないと云つて子供を責めた。

子供もこれには、ほと〳〵困つて終ひ、ついには子供ごゝろにも苦しい時のなんとやら、大人にならつて神佛にたよる他なしと、赤心こめて責めらるまゝに神佛を拜した。

すると畑に煎豆が二つの可愛いゝ手を出した。嘘ではない煎豆の芽が、ほんとにによつきりと發芽して、毎日のやうに空に向つて伸びて行つた。

そして、伸びるにも伸びて莖が八尺を越すと、きれいな花をもち千石の豆が實つた繼母は、かうなると、子供に對して、すつかり面目を失つてしまつた。

そして罪障消滅のために、その豆の幹を切つて材とし、太皷を作つて、永平寺に奉納して、佛に許しを願つて出た。

永平寺の寶物の中に、その繼母の納めた太皷が殘つてゐる。

豆太皷は、それを模したものである。

友引人形

京　都・伏　見

赤、群青、赤、綠、赤と一色の着物を被た子供が五人、打連れて、ならんでゐる可

愛い圖で、その先頭の一人丈が頭巾を被つてゐる。

この子供等は、われ〳〵家族にかはつて、死人の棺に入つて、あの世への迷路にお供してゆく使命を持つてゐるのだ。

名も友引人形、一寸この使命はうれしいものではないだらう、が友引の日の葬送を忌ふ全國的の迷神から言ふと、この人形連が無いと友引の日には絶體に葬儀がやれなくなるのである。

で、友引の日の葬送には、友引しない禁厭に、この豆武者五人を借りることにしてゐた。

また一部の人々は、家族の代表にこの人形を棺に入れて、友人の葬送でなくとも死者のお供をさせてゐた。

相合傘

高知・高知

竹林寺の若僧に戀の浮名が立つた。それが流行歌となつて、いやが上にも高知の人々の間に擴まつて行つた。

竹林寺の若僧の純信が、播磨屋小町のお島に懸想して、身分を忘れて、播磨屋橋に逢ひに來るといふのがそれだ。

ところが、その噂が事實だつたので、純信と鑄掛屋の娘のお島は、さうなると居たたまらなくなつて、たう〳〵駈落してしまつた。

玩具の相合傘は、その駈落道中の姿で、お島が衣服をとりみだして、提灯を片手に持つた、頬冠りの純信に、ピッタリと身をくつつけて相合傘で急いでゐる。

藤村ちやないが「夜明け前だ」。

夜が明けるとこの二人は、町役人達によつて國境の大佛小佛の峠で捕へられた。

そして、七日間二人は高知の町々を裸馬に乘せられて曝しものにされた。

なんと儚い戀だつたらう。戀そめてから三月ともならないのに、その引まはしがすむと二人は峠路を右と左にさかれて、追放されてしまつた。

「をかし事やな播磨屋橋で坊さん簪買ひよつた」

またの名を「坊さん簪」とも言ふ。

金魚提灯

青森・青森

津輕地方に

「ねぶたながれろ、まめのは、とつばれ」

といふ唄がある。

ねぶたは、ねぶた人の意で、夷を指し、まめのはは、忠實なる者の意で、內容は、夷人は亡んで、忠實なるものゝみ、止つてゐて呉れろといふのである。

これは、津輕地方の七夕に行はれる奇習で、舊の七月一日から七日まである俟武多祭の囃唄の一節である。

祭りには、とうてい他國には、見られない大小の風變りな萬燈の數々出て、屋根よりも高くそれをさし上げ、空も焦さんばかりにして、囃唄の中をねるのである。

この金魚提灯は、その中の一つを模したもので、大人も子供も總出でかうしたものの大きいのを、足を空にして、かつぎまはるのである。

それは、かぎりなくうるはしい夜祭の情景なのである。

話は一千年以上の往古にさかのぼらう。桓武天皇の代、征夷大將軍坂上田村麿に、攻めに攻め拔かれた、夷の親玉の大丈丸は、いまの大鰐溫泉場附近の山砦も打ち破られて、淺虫溫泉の近くにある平內山に立てこもつてしまつた。

この平內山は、一面を海に、一面を山にと云つた工合の、すこぶる立てこもるもの

には工合のいゝ土地柄であつたので、田村麿もこれを攻め落すのには困つた。

その時家來の策によつて、田村麿は、船に木の骨組をもつていろ〳〵な、鳥や、魚の形を作らせ、その上に紙を貼り、いろとり〳〵に彩色して、その中に兵卒をかくして、おもしろをかしく笛や太鼓で囃させて、平内灣を、漕ぎ廻させた。

すると、果して、この不可思議な光景に誘はれて、いや浮かれて大丈丸は濱邊に出て來た。

その時、よしと紙を破つて、兵卒がどつと濱邊に、躍り上つて、大丈丸の軍を討ち平げたのである。それがこの萬燈の大きなものであつた。

同じく同縣の弘前にも金魚提灯があるが、傳說は變らない。唯少しくこの方は、青森の放言を借りて言へば青森のよりもメンコくないことを、報告して置きたい。

八幡駒

青森・八戸

構圖の非常にしやれた駒として紹介したい。

福島、宮城、青森と北へ行くにしたがつて、駒の構圖が、だん〳〵と直線より曲線化されてゐるのが面白い。

この駒を一つ作り上げるまでに四十八細工かゝるといつてゐるがそれ程でもあるまいが、苦心のあとが相當眼につく。尤作に相違ない。

黑駒が古く、いま多く見受ける茶駒は近年のものである。櫛引八幡の流鏑馬の姿を模したものであるから、古型は、腹が脚を忘却したので無いかと思はれる程、ひどくたるんでゐてその上にスツ頓狂な顏をした猿が乘つてゐる。

點々は朱で、ところきらはず千代紙が貼つてあり眼には銀紙を菱形にきつて貼つてあつた。

創始は、七百年の昔承久といふから、三春駒の延歴、仙臺の木下駒の天喜よりもずつと新しい。

松山の女達磨

愛媛・松山

道後溫泉で賣つてゐる達磨は、赤い紙張子で漆黑な髪を兩頰に垂らした、幼童の女達磨で、顏は光澤あるみがきをかけ、その溫容にして、和やかな表情は、見るからに誰しも、にゆつとほゝゑみを覺えずにはゐられない。

そして頭上に一個と正面下部に三個の寶珠を銀色で描きなしてゐるあたりは、およそ典麗とも典雅とも言つてよからう。これは聞けばもつともであつて、それもその筈、應神天皇のお幼時の御姿を模し參らせたものだといふのである。

したがつてこの達磨は、その邊にある唯の緣起的なものと取扱ひがちがつて、ここ道後松山附近の人々は、粗末には取扱はず、神棚に安置して置くか、商家ならば、家內の高いところに祀つて、いとも尊いものとして祀つてゐるのが常である。

そも〳〵この道後湯の町と云ふところは、人皇十四代仲哀天皇が九州の熊襲退治に赴かれた途中、御滯在になられたところで、いまの溫泉の上の丘陵の神社は、その御假宮の跡であつたのである。

それも、こゝの靈湯と風光を愛でられてのことであつたといはれ、その間に神宮皇后が應神天皇を御懷姙遊ばされたのであつた。

その靈湯の神秘を讃へると共に、應神天皇の御幼時を記念して、この可愛いゝ達磨が永久に殘されたのである。

けんばい

岩手・花巻

壇の浦で平氏は、源氏に敗れると同時に、世は一回轉して、白旗源氏の世となり、源氏の諸將は、それ〴〵兵をまとめて、鎌倉の論功に與らんものと、東を指して、歸途に就いた。勿論源家の御曹子、この度の攻め手の總大將九郎義經も、その中の一人であつたことはこゝで云ふを俟たない。

ところが途中までかへつて來ると、鎌倉からの飛脚が立つて、總大將の義經だけは東國に入ることを斷はられ、謀叛の嫌疑から、兄弟が相反した立場に置かれてしまつた。

さすがの武將義經も、兄頼朝勢に抗しては戰勝の見込みもつかなかつたものか、わづか數人の家の子にまもられて、途中京より彼が育ての親の秀衡を慕つてみちのくへ

としのび落ちて行つた。

そして、途中困苦して、奥州平泉の秀衡館に着いたのが、その翌歳の夏であつた。

なつかしの第二の故家、みちのくの古館平泉、そこで彼九郎義經は、父と慕ふ秀衡と再會してどんなにか嬉しかつたであらう。ところが悪い運命はどこまでも影のごとくつきまとふか、まもなく秀衡の死となり、その秀衡の子泰衡の時代になると、父に似ぬひよわな泰衡は、鎌倉の勢ひに押されて、亡父の意に叛いて、義經を打つべく、一夜に兵火を平泉に起したのであつた。

義經にしてみれば、恩人の子への防戰はじつに意外であつたらう。

急を知るや彼は、月見坂に手兵を伏せると同時に高館に、辨慶をはじめ亀井その他の面々の數人を招いて、切ない彼の胸中を物語り、運命としての最後の別離の宴を張つたのであつた。

げに武人としての悲壯なるこの涙の饗宴、その席上泣いて舞うたのが、この玩具にあらはれた鬼劍舞である。頭髪をふり亂し、目に涙して、その手にした劍をさへ力なくいまも落しさうである。

愛知・野間

野間大坊の木太刀

平治の亂に敗れた源義朝が、京都六波羅より逃れて、鎌田兵衛政清、平賀四郎義宣澁谷金王丸、鷲栖玄光の四人の從者を連れて、尾州知多郡野間の庄司長田忠致の館にたどりついたのが平治元年極月の二十八日だつた。

ところが滯在わづか七日で、即ち翌春の永曆の正月三日の朝には、義朝は、安心して身を託した長田親子の反逆に逢つて殺されたのである。

その時、義朝は風呂に入つてゐた。長田の命令で義朝の首をとつたのは、彌七兵衛と濱田三郎の二人だつたが、義朝だつて剛のものであるから、この二人丈だつたらまさ〳〵首をかゝれることはなかつたであらうが、すつ裸體で、しかもこの二人の來る前に無双の大力と云はれる橘七郎に、風呂から出るところへ組付かれ、その七郎を膝の下

に敷いてゐたところへ、また新手の二人が突然斬つて出たので、もろくも敵に首をとられしまつた。

で、この時義朝は「せめて木太刀一本でもあつたら」と無念がつたと言はれてゐる。

野間の大坊にその義朝の墓がある。

木太刀は、義朝の歎じたといふ故事から轉じたものであらう。癒の平癒祈願にこの木太刀を墓に獻ずるのである。

姥はり石の傳說

これは傳說玩具ではないが、同じ知多郡馬場村の山中の姥達谷にある石で、その石が義朝の最後に關係した傳說を持つてゐて、面白いから遊子のために書いて置く。

義朝を殺す折、澁谷金王丸が義朝の傍に居つては、とうてい義朝を討つことが出來ないと思つたので、その朝魚獵に事よせて、長田忠致は金王丸を海邊へ誘つて出てゐた。

金王丸は、何ごゝろなく誘はれるまゝに濱邊にゐたが、そこで長田の館の急を聞きつけたので、引返へした。その途中で一人の老婆に逢つたので、主君の安否を問うたところ、義朝がすでに討たれたと老婆が返事したので、憤怒に堪へず拳を固めて、老婆を打つたところ、その老婆が化して石となつた。姥はり石はその老婆だと云ふのである。

豪徳寺の招き猫

東　京・世田ケ谷

新東京世田ケ谷區の豪徳寺は、もと弘徳寺と言つたもので、世田ケ谷城主吉良政忠の伯母が、文明年間に建立したものだ。この寺は吉田松蔭と井伊掃部頭の菩提寺として有名である。

ところで、この寺はいまでこそ豪壯なものであるが、もとはじつに貧乏そのもの

寺で、住職と決つたものも居らず、雲水坊主の通り宿だつたのだ。ところが天正年間になつて、この貧乏寺に住持が出來た。それがこの猫に關係ある宗顯なのである。

その和向が、ある日、日頃から可愛がつてゐた三毛猫を相手にして日向ぼつこしながら、

「三毛よ、この寺もかう貧乏しては、潰れるより外はない、俺もかう歳をとつては、雲水に出かけることも出來ぬでのう」と愚知をこぼしたものだ。

それからしばらくたつてそんなことを忘れてゐた或る日のこと、門前に嚴めしい武家が五六人馬を止めたと思ふと、づか〳〵と寺へ這入つて來た。和尚は不思議なこともあるものだと思つて、挨拶に出たら、その武家が門前を通ると、一匹の猫が不思議にも頻りと手招ぎするので這入つて來たのだと云つた。

その武家こそ井伊直孝だつたのだ。それ以來直孝は遠乘りの途次、この寺へ寄りよりした。そして和尚の宗顯を相手に、話に時を過して行くのが例になつた。この和尚は豪放恬淡であり、且學問もあつたので、直孝とも話が合ひ、氣に入られ、終にこの寺が井伊侯の菩提寺にとまで運んで行つたのであつた。

豪徳寺は三毛猫によつて救はれた。

井伊侯の墓所のうしろにある石塔「招福猫子」は、その三毛猫を葬つたおくつき所なのである。

で俗にこの寺を猫寺といふ。招ぎ猫は、その寺の開運本尊三毛猫をかたどつたものである。右手を掲げて、福を招いで呉れるといふ有難いマスコットなのだ。

招ぎ猫

東京・今戸

前項で豪徳寺の招き猫のことを書いたが、これは、花柳界などの縁起棚の上に、赤い小布團をしいて、チョコナンとして客を招ぎ込んでゐる猫で、商賣人の味方である。

慶長の頃、淺草並木町に一文菓子と草鞋を賣つてゐる婆さんがゐた。その頃でも店も大切なれば顔も大切で、同じく商賣をするにも、この店のやうに、おんぼろの長屋で、しかも、かて〻加へて皺苦茶の鹽じやけのやうなマネキンが、店に坐つてゐたんで

は、決して、繁昌しなかつたのは、今も變りは無い。

だん〳〵に人も寄りつかなくなり、しまひには何一つの品物を買つてくれ手がなくなつて、婆さんもスツカリいまでは、悲觀のどん底に落ちてしまつた。

で、ある日、ぶち猫を膝にのせてゐたが「これ斑や、わしの貧乏も、これではやり切れないね。お前にお肴をやる所か、この婆々もこの有樣ぢや、早晩死んで行かねばなるまいよ」と愚知をこぼした。

ところが、その晩婆さんが寢てゐると大猫がやつて來て

「婆さん、貧乏したとて心配しなさんな、こころまで貧乏しなければ、神佛は默つて置くもんぢやありません、こんな形の猫を土で作つて、店先に飾つて置けば、きつと店が繁昌しますよ」と、その大猫が、左足を上げて招ぐやうな格好をして見せた。

その後三晩もそれが續いたので、婆さんは不思議に思つて、今戸の燒物屋へ行つて大きな斑猫が左足を上げて招いでゐるところを土で作らせ、店頭へ飾つて置いた。

スルと不思議なことには、品物が賣れる、日に〳〵店が繁昌して來て、三年目には家藏まで建つ仕末になつた。それが猫が赤い小布團の上に坐り出したはじめだ。

饅頭問答

京都・伏見

一僧侶が、ある時往來で逢つた子供に「おまへさんは、父さんが好きか母さんが好きか」

と尋ねたところ、子供は手に持つてゐた饅頭を二つに割つて、

「おぢさん、そしたらこの饅頭は、どつちがうまい」

と云つたので、この僧侶はあか恥をかいた。

このこまちやくれた子供は、成長して後、一休禪師となつた。

長袖の可愛いらしい子供が饅頭を二つに割つて、兩手にはんぺらづゝ持つてゐる人形で、これを饅頭喰ひ人形と人が呼んでゐる。

傳法院の狸

東京・淺草

科學が相當進歩して來た明治時代の狸騒動だから話が面白い。

この狸騒動には曲馬團のフランス人まで登場して來て、鐵砲まで持ち出し戰鬪したが、狸は、文明の武器の鐵砲を屁とも思はず、笑聲で應戰して、相手にならず、大橋家の縁の下に籠城して動かず、遂にフランス人も、根まけして「日本の獸タヌキ化ける。私敗けた」と退却したといふナンセンスまで引き起した。

そも〳〵の事件の起りは、淺草寺内の傳法院の住職の唯我詔舜僧正と同寺のお目付け役大橋亘が相談して、寺内の雜木林を切り拂つたことにはじまつたもので、この雜木林に永年棲んでゐた古狸が、その棲家をとりこわされたのを、ひどくフンガイしての非常時復讐なのだ。

被害を蒙つたのは、したがつて、傳法院と大橋家だ。

この二軒に、畫となく夜となく毎日礫が投げこまれるかと思ふと、臺所の茶碗が躍り出したり、お盆が這ひ出したり、飯時には、食べようとするとお膳がユラユラと動き出して、天井へ舞上り、あれよ〳〵と騒いでゐると、又元の所にチャンと戻つて來るといふ仕末で、手の下しようも無かつた。

當時傳法院の近くに、有名な幕末の火消しの大親分新門辰五郎も住んでゐたので、やつぱしこの狸騒ぎにも參加した一人だつたが、相手が狸なので、さすがの親分もこの仲裁には、手を燒いてゐた。

ところで、その矢先の或晩、新門が寢てゐると、チャン〳〵〳〵と半鐘の音がして、火事は表の傳法院だと、戸外で人が騒ぐので、こは大變と、飛び起きて見ると、少しも火事らしいものも見えず、半鐘もなつてゐない。

で不思議に思つて傳法院までやつて來ると、寺の者共が臺所で騒いで居る。何うしたかと訊いて見たら、今小火があつて消止めたばかりだと云ふ。

ところへ僧正が出て來たので、自分が馳付けて來た話をすると、僧正は「私も今夜

不思議な事に逢つた。夢現にウツラ〳〵してゐると、小僧がやつて來て、私は境内に棲んでゐる狸であるが、棲家を荒されて、身の置く所かない。で祠を建てゝ、神に祭つてくれ、さうして呉れゝば、惡戯を止めるし、またこの火事も消してやると云つて立ち去つた。トタンにこの臺所の火事騒ぎで、ビツクリした」と語つた。

新門は、迷信の強い男だつたから、この話を聞いて、早速發起者となつて、狸のお宮を建てゝやつたので、この事件は解決された。

いまの淺草傳法院内の鎭護神社は、その狸を祭つたもので、鉛の金の狸が、そこから授與されてゐる。

火防、盜難除のお狸樣といふのは、これである。

狸は、明治二十二三年頃まで、神社の祠に棲んでゐたが、その後、表へ出てウロウロしてゐるところを土地の者に、見付けられて大日堂の裏で打殺された。

嫁おどしの面

福井・吉崎

文明の歳、福井の十樂村の百姓に與三次と言ふ者がゐたが、この與三次の妻の清は信仰の心が厚く、當時蓮如上人が居つた願慶寺に、月に幾回となくお詣りしてゐた。

ところで、この信心家の嫁をもつた姑はと云ふと、また格別な慳貪婆で、神も佛もあつたものでなく、たゞ嫁をこき使つてさへ居ればいゝといふしたゝか婆だつたので、嫁の信心が、面白くなく、なんとかして止めさせたいと思づてゐた。

そこで或る日、淺墓にも祖先傳來の面をとり出し、白の帷子を着込んで、先廻りして參詣の通路の谷間に潜んで、嫁の來るのを待つてゐて、そら鬼だぞと、通路に立ちはだかつて嚇した。

ところが嫁が、チツとも驚かず、涼しい顏をして「食まば食め、喰はば喰へ、金剛

の他力の信はよもや食むまじ」と、唱へて、スタコラ、見向きもせず願慶寺へ行つてしまつたので、婆も致しかたなく、家へ引き上げて、さて面をはづさうとしたら、肉にくつついてしまつて、とれなくなつてしまつた。

そしてまど〳〵してゐるところへ、嫁がかへつて來た。

嫁は、驚いた。婆も、驚いた。

婆は仕方なく「さつきの鬼は私だよ」と、一部始終を嫁に話すと、怒ると思ひきや嫁が、涙をながして、「お母さんそりや大變だ、私も念佛申すから、眞心をもつて、一所に念佛申され」と勸めるので、婆も苦しいのでその氣になつて、一心に念佛を繰返してゐたら、面が顏から、ころがり落ちた。

それから、この慳貪婆も佛門の功德を知り初め、終には、嫁と仲よく手をつないで願慶寺にお詣りする姿が、見受けられた。

この面は二三寸位の土面で、一寸滋味のある面である。鬼面とは言ふものゝ、磐若面らしい。

吉備津の犬

岡山・眞金

百濟の王子溫羅が、手兵をもつて、海をのしきつて來て、中國に現れ、城を築いて、人民を惱ましてゐるといふので、崇神天皇の命によつて、四道將軍の一人である吉備津彥命が、犬飼、鳥飼の二將を引き具して、吉備の國で大合戰を行つた。

敵將溫羅は身丈一丈四尺といふ大男で、力强く、その上變幻自在の術を知つてゐるので、この合戰は、味方が始めから惱まされどうしだつた。

で命は、大いに怒つて、自ら陣軍の先に立つて、進まれ、肉彈戰とまでなつてしまつた。

溫羅は、この戰ひでは雉子に姿を變へてゐた。それを知つて命は怒られ、鷹となつて山へ溫羅を追ひ込んだところ、溫羅は窮して鯉となつて、川を下つた。そこで命は

鵜となつて川を下り、遂に溫羅の鯉を嚙んでしまはれたので、さすがの溫羅も降伏してしまつた。

戰ひは、そんなわけで、溫羅と命の一騎打ちで終つてしまつたが、その間にあつてよく命を支援し、また敵狀を探つて、味方を有利に導いて呉れたのが、じつに犬飼部の軍犬であつたのだ。

見方によつては、この戰勝は、そんなわけで、命と犬の勝利であつたと言つてもいい。

吉備津の犬と雉はそれによつたものであつて、吉備津神社の社前で賣つてゐる。

權兵衞種蒔き

大阪・大阪

大阪の糸くり人形に「權兵衞種蒔きや。烏がほぢくる。三度に一度は追はずばなる

まい。ズンペラ〳〵」といふのがあつたが、今はあるか如何か。

くわへ煙管に頬かむり、つぎはぎだらけの權兵衞は、じつは武藏の國、今でも駒場に、レツキとした子孫が殘つてゐる。

權兵衞の話となると大變な横着物のやうに思へるが、同じ水呑み百姓でも、鳥を飼はせたら天才で、權兵衞に頼めば一時にして、駒場へ武藏野の小鳥を集めることが出來たとウソのやうな話がある位である。

ところで、權兵衞には「鳥飼ひ餌蒔き役」といふ立派な五人扶持が將軍家からつけられてゐた。この權兵衞さんが來ずば、鷹狩が出來なかつたといふから大したものだ。

いまならばさし詰、上野の動物園長といつたところだらう。

だが、そこは天才であるから、普通の人のやうには行かない。將軍家の前だらうが一向おかまひなしの、くわへ煙管に、手に桝をもつて、爐端に寢そべつたまゝ、鳥を集めてよろこんで居るといふ仕末だつた。

分福茶釜

群馬・館林

上州館林にある青龍山茂林寺は應永の頃、正通といふ和尚の開山にかゝるもので、その頃守鶴といふ納所坊主がこゝに居つたが、彼は茶を煮れば何百何千といふ多くの客に飲ませても盡くることを知らないといふ直徑二尺寸餘の調法な釜を持つてゐた。その後正通が世を去り、寺も二代三代と九代の住職が變つてしまつたが、しかしこの釜の持ち主の守鶴は、依然として年をとらずにゐた。

これも釜とともに不思議と云へば、不思議ではあつたが、しかし、そこは寺のことて別にそこまでも深く考へる者もなかつたと見えて、依然この二つの不思議は、なんの疑ひもなくそのまゝですんで來た。そして十代目の住職の天正七年、この寺に大法要があつた時、この調法な釜一つで、千人以上の僧侶の振舞に、充分に間に合つた

ところから、この釜に箔がつき「隋ノ分共福也」といふ意味から分福茶釜といふ名をもつて呼ばれることになつた。

越えて天正十五年二月には、永く十代の住職に仕へた守鶴のための慰安會がこの寺で催された。それはきはめて盛大なものであつて數千の檀家の人々が守鶴のために美酒美肴を持ち集つて、大いに飲み且賑うた。その日の主賓客の守鶴はといふと大の酒豪であつたので醉ふ程に唄ひ、數千人の酒客を對手に夜の更くるのも知らぬ有樣だつた。

が深更になり、客がボツ〳〵歸りかけた時には、よほど飲んだと見えて、さすがの酒豪の守鶴も、正體をなくし、客の歸るのも知らずにいゝ氣持になつてその場に醉ひしれて寢てしまつてゐた。そこで、夜中になり、小僧が客殿に夜着を持つて行くとあはれ、納所守鶴は何時もの納所ではなく、尻尾を出した狸の姿に化し寢込んでゐるのでビツクリして、その足でいそいで住職の部屋へ飛び込んで、そのことを告げた。

そこで住職が小僧を連れて客殿に見に來ると、なる程納所の守鶴は尻尾を出した狸の姿にかはりはてゝ、寢てゐるので、一度は驚いたが

「他言してはならぬぞよ」

と小僧にかたく口留して、その儘にして部屋に引返へし、寢てしまつた。

そして翌日の朝になつた。守鶴が、住職の部屋にやつて來て、暇を呉れと云ふので、これはと思ひ暇を出すと、守鶴の姿は何處へ消えたか、門外へ出るなりわからなくなつてしまつた。

この話が分福茶釜の實說だそうである。しかし茶釜の半化け狸の玩具の傳說はこれではなく、この玩具はまた面白い話を語つて呉れる。

四百年の昔、やつぱしこゝ茂林寺で、ある日のこと、小僧が土間に無雜作に置いてあつた塵だらけの古茶釜を、持ち出して、ゴツ〳〵井戸端で洗つてゐた。そしてそれを客殿に持ちこんで、炭をついで火を焚くと、茶釜に尻尾が出、足が出、によつきりと狸が頭をつんだして、這ひ出したので、びつくりした小僧は、その場にふるへ上り大勢の仲間を呼んで、さわぎ出した。

そして、それ箒よ、物干し竹よと大さわぎして、小僧仲間がよつてたかつて、この茶釜の怪物、狸をふん捕へ繩でしばつてしまつた、すると、狸はまたもとのやうに古

茶釜に化け變つた。

そこで小僧仲間がより〳〵青い頭をあつめて相談の上、この古茶釜を、その話をして出入の古物商某に拂下げた。そして轉々と茶釜は古物屋の店を移つてゐるうちに、頭のいゝ買手が出てそれを買ひ、見世物興行に出して、狸にして見せたり、釜にして見せたりしたから、大當りに當つて、それが評判となり、一躍してそのためにその男が成金に出來上つてしまつた。

ところが、この男は、資産が出來ると、餘程心根の善い男だつたと見えて、一人で大儲けばかりしてゐては、申譯ない、これもお茶釜様のお骨折りがあつてからこそだと云ふので儲けた金の半分を添へて、もとへもどつて茂林寺へこの茶釜が、返納されたものだと云はれてゐる。

口入稲荷

東京・淺草

何時の世になつても變らぬのが人情で、あそこのお稲荷様にお願ひすれば、キツといゝ嫁子の口が授かるよと聞けば、他人に頼んだつて、らちがあくものかと、人間は、一度はそのお稲荷様へ押しよせて往く。それが二三人にでもうまく嫁子の口があたつたものなら、ウワア大變なことになつて、その界隈は申すに及ばずしまひには、滿洲あたりからまで、汽車や船にゆられても拜みにやつて來ると云ふことになる。そんな工合のいゝお稲荷様が現今ありますかと云ふと、あります、東京、淺草淸川町の玉姫稲荷の地内にある口入稲荷がそれである。

しかも、その稲荷は嫁ばかりを專門に世話してゐるのではなく、一歩進んで、新夫婦の職場まで世話して呉れるのだから、じつに有難いお稲荷様なのである。嫁はみつ

かつた、職場は出來た。あとは働くだけが殘されてゐるばかりで、當人のこゝろがけ次第で富者にもなれようと云ふものだ。

しかし、かんたんに考へて、さう云つたからと云つて、今すぐに飛び出して行つたつて駄目だ、物には順序といふものがあるから、その順序を踏んでからお賴みして御利益にあづからなければならない。

先づ嫁子を探さうとなれば、社殿に詣でゝ、そこで、緋の着物に、紫紺の羽織を被實子を持つてゐる坐り姿のおこんこ樣を頂けて戴き、そのおこんこ樣に自分のこゝろにおもつてゐる嫁子に對する希望を述べて、うや〳〵しくお尊體に捧げてお願ひすることだ。この時成就致しましたら、私の身替りに旦那の人形をも加へて呈上致しますと云ふことを忘れてはいけない。勿論そのことは、成就したら必ず實行することになつてゐる。

次に職業を探して貰ふ時は、そこはお稻荷樣も心得たもので、チヤンと口入れと繪馬に書いたものを持つた袴、袴のおごそかに坐つた狐姿を社殿で授くるやうにしてあるから、それを受けて、願ふのだ。但し疑つたりしたら斷然效を奏さない。

そんなら、そのお本體の由來をきかせて呉れと云ふのか、元祿十四年、新吉原の廓內にあつた口入所高田屋七兵衛といふ者が、當時この稻荷を家內に祀つて、朝な夕なに尊崇してゐたのであつたが、或夜、この稻荷樣が夢枕に立つておまへだけでなく、世間に出て、多くの人間の苦しみを救つてやりたいと告げたので、現在の地へ移し、口入稻荷として世間に出してあげたのだと云はれてゐる。奇特な神樣があつたものである。この社から、も一つ羽織の立姿のおこんこ樣も授ける。これはもと九郎助稻荷から授けたものであつたさうだが、いまは、この社で、人間共の口入れの使ひの世話方を受持つてゐる。

法華嶽寺の鶏車

宮崎・宮崎

法華嶽寺は養老二年八月八日に、初めて宮崎市外本庄町の山頂に伽藍が置かれ、延暦二十五年に本堂が建ち、大同三年に完成された寺で、開山は傳教大師である。特に名高いのは、和泉式部が、癩病を病んだ時、三藥師に祈願をかけ、越後の米山より三河の鳳來寺へ、そしてこゝまで來て、ついに身を悶えて、岡より深淵に身を投じたがそれがかへつて幸ひになり治癒したと傳説があるからだ。したがつて、こゝ法華嶽には式部が腰掛けて、浮世を嘆いたといふ松や、そこから身投げしたといふ岡が殘つてゐる。

その大同三年の法華嶽寺の建立が完成された時、この嶽に百歳になる翁が現れて、仁王門、その他佛像彫刻の木片をかきあつめて、この近村の小供等に、壽命を授けてやると、あやしげな車のついた粗末な木の彫りものを與れた。

それがこの鶏車である。

そして、いまだに、それが永く小兒の守護の禁厭として、同寺の門前に傳へ賣られてゐる。

大國魂神社の烏扇

東京・府中

昔、大地主神が田を作つてゐられた頃、その田を作る人々を一夕招待なされて、牛肉を御馳走された。ところへ丁度御歳神の御子が通り合はせられて、その光景を道遠く御覽になり、早速御歸館なられて、父の御歳神にそのことを御報告なされたので、父御歳神は、ひどく四つ足を嫌された、大地主神の御行ひを怒られて、その田にたくさんの蝗を送られ、忽ちにして、その苗葉を枯らしてしまはれた。

それと知らないのが大地主神で、これは如何致したものであらう、何か祟る者でも

あつてのことではあるまいかと、驚愕され、巫者を招かれて、その由を占はしめてみたら、巫者の云ふのには、これは御歳神が怒つてなされるのだ。よろしく白猪、白馬白鶏を捧げて許しを乞ひなさいとの話だつた。そこで早速、教へられたまゝを行つてみると成程、枯れた苗葉が蒼々と茂り、その歳の作物は近年にない豊作であつた。

その時この團扇を田畑の害蟲除けにと御歳神から大地主神へ賜はつたものだといふ。

即ち、これで田畑を扇げば、害蟲が退散して、收穫が多いと云ふのである。

縣別土俗玩具抄

青森縣

青森の金魚提灯　舊七月一日から七日間同市で行はれるねぶた祭で賣る

八戸の八幡駒　猿の乘りたるものとしからざるものと二種あり、青森、八戸にて賣る、所謂郷玩三駒の一つ

オシラ様　青森市にて賣る

弘前の金魚提灯　舊七月一日から七日間同市で行はれるねぶた祭で賣る

弘前人形笛　土隅にして、梟笛、鳩笛、異人人形笛、猫笛等數十種、昔は子供の蟲封じの禁厭として子供に嘗めさせたもの

蘇民將來　舊正月七日、津輕郡岩木山神社七日堂にて授く

大鰐のこけしとゑちこ　こけしとは「木を削つて作つた子供」と解釋したらいゝと思ふ。じつに洗練されたフアイ

溫湯のこけしとゑちこ

ンアートの一つで圓と圓筒をもつて組み合はせた木の人形で、簡素な筆致でもつて、それが立派に生かされてゐる、多分にローカル、カラーの横溢したもの

岩手縣　花卷の土人形

二百有餘年の傳統をほこるもので、三月の雛の系統に屬するもの、天神、首人形などは最も勝れたものと言ふてよからう

劍舞（けんばい）

木製、花卷にて作るもの義經が劍をとつて舞つてゐるところで鬼劍舞ともいふ

花卷の板馬

一枚の厚い板を馬の姿に切り抜いて、尾とたてがみを本毛でくつつけて、車のついた臺に

乘せたもので、脚を赤い垂れ紙で隱し、黑白の手綱のついた、きれいなものである。鄕玩三駒の一つ

盛岡の板馬

土製大正十五年に出來たものといふから、歷史は新らしい

ちやぐちやぐ馬こ

張子、氣仙の高田町で製産されるもの、獨自の風格が現れてゐて面白い

氣仙の俵牛

舊一月七日、江刺郡山內藥師にて授く

蘇民將來

木製、昔から岩手の山野に自生する山桑の木は人體に特效があるといふので乳兒に無病息災で育つやうにとしやぶらせた、これはそれで、こけしの小さくしたと同じやうなもの

キナキナ坊

花卷のキナキナ坊とゑちこ

盛岡のキナキナ坊
志戸平のこけし、キナキナ坊、ゑちこ
鉛のこけし、キナキナ坊、ゑちこ
遠野のキナキナ坊
湯田のこけしとゑちこ
一ノ關こけしとゑちこ

宮城縣

仙臺松川達磨　往時松川豐之進が發案したといふ、マツゲを本毛で植ゑ、眼をガラス玉で作つてある、歳の市にて鬻ぐ

福助達磨　歳の市にて鬻ぐ

仙臺俵牛　張子、同上

熊乘金太郎　同上

木下駒　木製、青葉駒とも云ひ、舊三月三日木下國分寺祭典に鬻ぐ

ぽんぽこ槍　瓢簞にて作れるもの舊三月三日國分寺祭典に鬻ぐ、風雅なものである、火伏の禁厭

仙臺神輿　大崎八幡祭禮の際鬻ぐ

竹駒木馬　岩沼町竹駒神社初午祭で賣る

仙臺張子面　數種、烏天狗、柏、狸等は特に面白い

便所の神様　土偶人形、岩沼地方で販賣

蘇民將來　舊三月三日木下藥師國分寺より授く

蘇民將來　舊三月三日遠田郡箟々嶽藥師より授く

仙臺こけしとゑちこ

秋保のこけしとやみよ(おしやぶり)、獨樂

作並のこけし

青根のこけしとゑちこ、郵便板こけし

鳴子のこけしとやみよ、臼杵、獨業
彌治郎のこけし
遠刈田のこけし
小原のこけしとゑちこ
鎌先のこけし、ゑちこ、郵便こけし
白石のこけし

秋田縣

中山の土人形　「なまはげ」の土偶はこの中山人形の部類で、横手町の近く、中山で製産販賣、花魁などなかなか面白いものがある

木地山のこけしとゑちこ、車人形
瀧ノ原のこけしとゑちこ
大湯のこけしとゑちこ

大館のこけし

山形縣

米澤の相良人形　嵯峨人形と匹敵すべきもので、人形の優雅さは泥人形の域を脱してゐる。特に女形ものにその特異さがある

鶴岡の土人形　瓦人形とも云ふ

笹野彫　縣下に誇り得るもの〻一つであつて、先民族の遺して行つた削りかけ藝術の一つであると云はれる。戎、大黒、龜の子、笠冠、お鷹ぽつぽ等じつに面白い。舊六月十二月の十七日の笹野觀音の祭で賣る

山形の土達磨

鶴岡の板獅子　庄内板獅子とも云ふもので、二枚の板を組み

合はせて作つたもの、したがつて振ればぱちぱちと鳴る平板獅子

繪蠟燭

十一代將軍家齊公より日本一家の文字と錦衣一着を賜つたといふ由緒づきのもので、この創案者は皆川重兵衛

酒田の獅子頭

山形のこけし

潟海のこけしとゑちこ、獨樂

上ノ山のこけしとゑちこ、郵便こけし筒

肘折のこけしとゑちこ

高湯のこけし

小野川のこけしとゑちこ

銀山のこけしとゑちこ、木達磨

及位のこけし

酒田のこけし

米澤のこけし

向町のこけしとゑちこ

福島縣

三春の張子

三春の張子は、天下一品であるとさへ云はれたもの、いまはさうでもないが俵牛、玉兎、首振虎、獅子舞、踊女、天神などは、さすがに堂々たる尤玩である。

三春駒

三春の子育木馬

木製、郷玩三駒の一つ

寸餘のものであつて、これを弄ぶ子は健かに成育し、日々に三粒づゝの大豆をこの馬にそなへて祀れば子寶を得るといふ

會津若松の張子

七夕の夜、織姫が乘つて來るなどゝいふ夢幻

的構圖の赤べーこ、頭の三角にとんがらした

會津若松の天神　可い起姫など、うれしいものばかりだ

會津若松の姉様　煉物面長なじつに立派なもの

福島　まさる　舊正月十五日福島羽黒山神社の祭禮に露店で賣る

岩角觀音の撫牛　初寅の日に二本松岩角觀音より頒與される

久ノ濱の張子　こゝの動物はいづれも小つぼけな人間を乘つけてゐるのが特長だ、いたづら顏の天神などあつてほゝゑましくなる

飯坂のこけし

蜻湖のこけしと獨樂

土湯のこけし

熱塩のこけし

玉山のこけし

中ノ澤のこけしとゑぢこ

茨城縣

眞菰の牛馬　潮來地方で七夕に作るもの

水戸の農人形　農本主義の水戸烈公が、自分の主張を徹底させるために作らせて、自分から進んで愛玩したといふ土偶

村松の眞弓馬　舊正月十五日と三月十三日の村松虚空藏堂の祭禮に繋ぐ、素朴な板馬

村松の實船　眞弓馬と同時に繋ぐ

千葉縣

北條の神輿　九月十四、十五の兩日北條鶴ヶ岡八幡の祭禮

に繋ぐ、優雅なもの

群馬縣　豐岡の達磨

女達磨と二種、關東の達磨の總元祖だけのことがあつてさすがに洗練されてゐる

招ぎ猫

張子、愉快な猫である

茂林寺の文福茶釜

張子、茶釜から狸が首とおつ尾を出して竹に吊られて游いでゐる

迦葉山の天狗面

まつかな張子の面

山名八幡の獅子頭

十月十五、十六の兩日の山名八幡宮の大祭に露店で販賣する。この宮の獅子頭は神功皇后が三韓征伐をなされた時、高麗から獻上したもので應神天皇がお幼時にもてあそばれたことから玩具に模したものだといふ

埼玉縣　鴻ノ巣の煉物

櫻井の達磨よりものとすれば天神、鋼車位のもの、それも現在では感服出來ない

櫻井の達磨

女達磨と二種、先進豐岡に勝るとも劣らぬところがある

袋山の張子

達磨、首振虎、獅子舞等があるが、一見稀薄

岩槻の五色達磨

親指大の可愛い〻もの

比企萩日吉神社の猿

舊正月十五日日吉神社の祭禮に限り頒與、子供の病氣平癒の禁厭

おきのさん

熊谷在奈良の辨財天から御身體の身替りとして出したといはれてゐる

東京府　今戸の土人形

洒脫なところが愛される、有名なものに河童

月見の兎、子守狐、羽織狐、丸〆の猫等がある

柳森の親子猫　神田柳森稲荷より授く

鎭護神社の狸　浅草傳法院内の鎭護神社で頒與する、鉛製の狸

長谷寺の夜叉神面　顔の腫物に祈願として奉納する

雜司ヶ谷の木兎　雜司ヶ谷鬼子母神社の境内で賣つてゐる。萱の木兎、これはじつに風雅なもの、これと蝶を賣つてゐるが、これも構想が面白い

富士神社の麥藁蛇　六月三十日から七月三日まで、三日間の駒込富士神社の祭禮に露店で賣ぐと同時に神社よりも授く

芝神明の千木宮　九月十一日から二十一日まで十日間の芝大神宮祭禮に賣ぐ、地内の床店で賣るものと、同じく太々餅にて頒けるものと二種

柴又帝釋天の猿　御幣猿、彈き猿等

飛んだり跳ねたり　亀山のお化けとはこれ

亀戸天神の雲　正月二十五日亀戸神社で頒與し、また新舊をも交換して與れる。同日卯槌、卯杖も頒與する、この卯槌、卯杖は災害、惡疫の禁厭に枕上に昔の人はおいて寢たものだと

亀戸の張子　蛸踊、藤娘、松茸おかめ等名高し、但しお粗末である

東京犬張子　じつに傑作品である、お宮詣りの祝品として贈るもの、二寸位の笊被犬張子は子供の鼻のつまらぬ禁厭に用ふ

新田神社の矢守　矢口の新田神社の祭禮は十月十日で、神社より授與するものと、露店で賣ぐものと二種あり

王子權現の槍　八月十二、十三の兩日王子權現槍祭に鬻ぐ、木製、赤、黑の二種、火難、盜難、魔除の守護

豪德寺の招ぎ猫　世田ヶ谷豪德寺の門前にて鬻ぐ、木彫と土燒の二種

口入稻荷　淺草清川町、玉姫稻荷地內口入稻荷より授く

神奈川縣

梅澤の達磨　この達磨は長い鬚が植込んである。女達磨と二種

横濱の蕪　酉の市で鬻ぐ、折疊みが出來る紙細工で、一寸面白い

岡村天神の天神　正月二十五日横濱岡村天神の祭禮に鬻ぐ、赤絲の二種、土偶

頓朝の像　鎌倉白旗神社の社前にて賣る

靜御前　同上

箱根の山駕籠　綱代の屋根の竹作りの駕籠で、中に小さな蒲團まで入つてゐる、昔の箱根山越えの道中駕籠を模したものである

新潟縣

浦佐の猫面　張子、靑白の二種、浦佐町本町玉屋菓子店で賣る

二十村の木牛　鬪牛をまねて、子供が持て遊ぶもの、野趣滿々たる桐製の牛の頭である

今町の土人形　坐り娘、鳩持等が面白い

今町の首振虎　眼玉に硝子をはめ、麻を用ゐて鬚と尾にした位が特長と云へよう

今町の三角達磨
山口の三角達磨
見附の三角達磨
三條の六角凧

新潟縣は何と云うても凧の國である。傑出したものにこの六角凧、高田の眞棒凧、白根の役凧、小千谷の盃凧等がある

福井縣

吉崎の嫁おどしの面

吉崎蓮如山願慶寺で頒與する、二寸餘の土燒面

永平寺の豆太鼓

永平寺から頒與するものと門前で鬻ぐものと二種あり、共に小型の木製の太鼓

長野縣

蘇民將來

正月八日神川村國分寺八日堂より授くるものとその日境内の露店で鬻ぐものと二種、共に全國の蘇民將來の王なり、疫除、開運、出世の禁厭護符

大黑天の木槌

じつに洗練された木槌で、國分寺大黑天甲子大祭に下附す

善光寺布引牛車

車附の煉物

鳩

野澤溫泉で販賣、蔓細工で出來てゐる珍らしいもの

山梨縣

甲府の達磨

甲府の白達磨は名高く、また子持達磨も珍らしい

鹽山の鳩笛

信玄燒の祖、眞島幸右衞門がはじめたもので

明るい茶色の素燒で脊の左右に白梅をあしらひ、更に釉藥をかけたすこぶる俳味豐麗な逸品

靜岡縣

祝　鯛

戎講に飾るものであつて、二匹の鯛を向ひ合せて、麻でその口と口とを合せたところを結へた構想は面白い、張子、小三四寸より大は數尺に及ぶ

靜岡の達磨

特色ありて面白し

首振虎

べしやんこの虎、但しお粗末なもの

犬張子

とんがつた顏の犬張子

濱松の犬ころがし

木の大きな輪に乘つた張子犬、他に兎、柿乘猿等がある

清水のイチロンサン

蟲除祈願に使用されるもので、市郎兵衛が創始したといふ土製の首人形、種類が非常に多い。なかでも河童など珍中の珍とすべきか

おかんちやけ

阿部郡慶洞院の祭日七月十九、二十の兩日に同院の門前で鬻ぐ、子供の姉樣遊びの材料

奥山の山住さん

狼の土偶で胸に山住の金文字がくつついてゐる、周知郡奥山の山住神社で授く

愛知縣

名古屋鉢卷達磨

豆絞りの鉢卷を特筆したい

龍泉寺の首鳥

東春日井郡志談龍泉寺より厄除長壽の守護として頒與される、紅白二種の竹串にされた張子首馬

名古屋笠寺の藁馬

厄除開運の禁厭として鬻ぐ、立馬、首馬の二

種あり、後者の方が面白い

牛若、辨慶　名古屋東照宮の大祭に出る山車の人形を模したカラクリを取り入れたもので、四月十五、十六、十七の三日間に渡る同大祭の露店に賑ぐ

山車　本町の猩々、七日町の橋辨慶、傳馬町の林和靖等は同大祭の山車を模したもの

餅搗兎　二匹の兎が交互に餅を搗く趣向に出來てゐる同じものでちよん髷の男が二人で搗くのがあつたが、今は廢絶してない。尙兎が一匹で搗くものもあつて、人はそれを通例のものと考へてゐるやうだ

名古屋の虹鳳　この鳳はい〳〵

戸部の蛙

蘇民將來　名古屋洲崎神社で授く

櫻天神の鷽　舊二月廿日、廿五の兩日名古屋櫻天神の大祭に授く

起の土人形　創始約百五十年と云はれる、特筆を强いやすれば色彩が濃厚であると云ふ位なもの

寂光院の燕　舊三月三日と四月三日に丹羽郡犬山寂光院の緣日に賑ぐ、すこぶる土俗趣横溢の佳品

大師堂の木太刀

西尾の土人形

西尾の赤馬

西尾の白犬　煉物、共に五六分の小品であるが、この方がはるかに勝れた輕快さがある

豐橋の鳳　大將、鯰けろり、扇等

豐川稲荷の狐面　厄除開運の守りとして頒與する、趣味豐かな

蒐足神社の面　ものと云つてよからう

四月十、十一の兩日の寶飯郡豐秋村小坂井の蒐足神社祭に境内で舞ぐ、鐘馗面が有名である

蒐足神社の風車　面と共に魔除けとして舞ぐもの、雅趣に富んだものであつて、求め歸つて戸口に挿しておけば絶對に魔をさけ得るといふ

岐阜縣

高山の一位彫　民藝として佳品

美江寺の鐘鈴　舊一月三十日御鐘祭に露店で舞ぐ、その種類多く、全國的に盛名を馳す、土鈴の王樣か

富山縣

獅子頭　富山の獅子頭は、全國一と云はれてゐる、敢へて筆者が筆を俟つまでもあるまい

獅子笛　鶴岡の板獅子を笛にもぢつたと云つてよからう、がこの方の頭の方が鶴岡の板獅子よりも趣がある

富山の土偶　先づ天神と夫婦人形を掲げよう

石川縣

金澤の魔除虎　土偶、友引人形の一種で葬送の際これを河中または道路に棄てれば千里を走つて魔性がかへらぬといふ

疱瘡の神樣　土偶、男女兩體の立姿

便所の神樣　土偶、夫婦兩體の坐り姿

虚無僧　土偶、夜泣きの禁厭として作つたもの

八幡起上り　有名なもの、應神天皇のお幼時のお姿を模したものといはれてゐる、起上りの最高峰を往くものであらう

餅搗兎　木製、赤い腰布を卷いた兎が、糸にカラクラれて餅を搗く、可愛いゝもの

米喰鼠　弓付木製の鼠

金澤の姉様

滋賀縣

草津ビンビン鯛　張子

猩々　張子、木の柄杓とボール紙の杯をもつた五寸餘の立姿、赤い衣服に白袴をはいてゐる。筆者は、斷然これに最高峰の一票を投ずる

起上り小法師　張子、茶目つたやうな女雛磨

大津四ノ宮祭の曳山　十月十日大津天孫神社大祭に露店で賑ぐ

大津繪人形　土偶、鬼の寒念佛を揭ぐ

日吉神社の福良雀　正月三日滋賀坂本日吉神社で頒つ、特色あるもの

日吉神社の猿　火伏の禁厭として同社より頒つ

三重縣

石取祭の山車　七月十日より十二日までの桑名町桑名神社大祭の山車の玩具、小さい赤提灯をたくさん列ねた面白い山車

多度の彈き猿　伊勢多度祭に販賣、例年五月五日が祭例

四日市の大入道　九月二十五、二十六兩日、四日市諏訪神社例祭に賑ぐ、蒲團縞の着物をきた男のお化けで、竹串を動かすとペロリと舌を出しケロリと眼

玉をヒンむく

四日市の舌出狸　大睾丸の狸が坐つたまゝでベロリベロリと舌を出す

身代り蛙　二見興玉神社より授く、土偶の蛙で、小兒の痣、腫物等をわが身に受けて癒やしてやるといふ奇特な蛙

朝熊岳の撫牛　朝熊岳金剛證寺で頒與感服せるものにあらず

奈良縣

唐招提寺の團扇　五月十九日同寺で施餓鬼と同時に團扇撒會を執行授與

手向山八幡の繪馬　奈良市手向山八幡宮の祭神は武勇の神で馬を愛されたといふ故事に起因して作られたもの有名である

法華寺の犬守　添上郡佐保村の法華寺で頒與、二三分の土偶

奈良張子鹿　安產、疱瘡除、小兒の夜泣きの禁厭

安井人形　法隆寺前で鬻ぐ、土偶

和歌山縣

瓦猿　桃を持つた猿の立姿で、これは市內栗林八幡境內の日吉山王神社へ奉納して、安產、子授を祈願する

米搗車　木製、一寸類の無いものだ

加太淡島神社の守雛　海草郡加太淡島神社で頒與、一名淡島雛とも云ふ

淡島神社遷使殿の蓁　勝負の爭ひに效能があるといふ

紛河の流し雛　大豆大の土の首を添へた男女の二體の紙雛

高野山の導犬

高野山金剛峰寺の縁起として傳はる、黑白の二匹の犬を松の枝に象つた竹に吊したもの、この犬こそは狩場明神の使ひで弘法大師を本山に導きしもの

京都府

伏見の土人形

わが國の土偶の先祖、こゝにはスバラしいものがたくさんある。傳玩として饅頭喰ひ人形その他に面白いものとしてちよろ人形、友引人形を掲げる

成田屋人形

七代目市川團十郎の需めによつて、七代目の得意の襲承の役、矢ノ根五郎、暫、助六を作つたに創始したといふ、深草の割松屋製造

壬生寺の面守

四月二十一日より修行する同寺の大念佛狂言及節分に授與す

壬生寺の面

同日露店で鬻ぐ、數種の張子面

北野神社の牛車

毎月二十五日同天神の縁日で販賣、木製、極めて簡素なるもの、土俗の趣深し

祇園祭の鉾

祇園八阪社祭に露店で鬻ぐ、前者も同じ、土俗玩具としてまれに見る高價品もある

祇園祭の神輿

他に類の無い小さなもの、二三分の人形ばかり

清水の豆人形

綴喜郡石清水八幡即ち男山八幡で頒與するもの

男山八幡の楠鳩

楠の素材の鳩、男山の刻印がついてゐる、小兒の夜泣き止めの禁厭

男山八幡の紙鯉

同じく男山八幡の社前で鬻ぐ、赤に墨彩の氣分のいゝもので、神功皇后の龍神の鯉の故事

によつて創始されたもの

男山八幡の簪 じつにきれいなもの、欲しいのは女の子ばかりとは限らない

三宅八幡の土鳩 愛宕郡修學院三宅八幡は小兒の蟲封じ專門で蟲八幡とまで呼ばれる、この土鳩は神社へ奉納するもの

太秦の牛祭面 十月十二日夜葛野郡太秦廣隆寺牛祭に千枚に限り頒與す

嵯峨の面 葛野郡嵯峨愛宕神社の鳥居前で鬻ぐ、大型のじつに面白い面

大阪府神農の虎 十二月二十三日大阪道修町神祭に頒與する張子の虎

角力 張子、可愛い〻角力で取組んでゐるところをまんなか〻ら紐で吊すやうになつてゐる、大髻のちよん髻が馬鹿に利いてゐる

地車稻荷の地車 北區西堀川町堀川神社境内の地車稻荷に奉納するもの、形態及傳說も面白し、木製

生玉人形 天王寺生玉神社の裏門近くで鬻ぐ、大阪での尤玩であつて遠く操り人形を模したもの

住吉神社の右神馬 住吉神社で頒與する土偶で腹に住吉御神馬の刻印が押してある

種貸さん 住吉神社の末社種貸神社へ子種を借りるために奉納するもの、緋の袴の巫女が赤ん坊を抱いてる寸餘の土偶で面白い

初辰の猫 同じく末社楠玉神社の露店で鬻ぐ、羽織姿の招ぎ猫四十八辰を始終發達にからんで欲での

虚無僧　祈願はとんだ愛嬌なり

高さ五六分の小さなもの、これを臍の上に乗つけて置くと、船、車に酔はぬといふ有難いもの

跳ね達磨　住吉神社の門前で賣る。種類多く、蛙、蕪、瓜等あり共に面白く、大阪ものとは思はれぬウキットがある

住吉の千疋猿　土偶、他に嬉々猿、庚申猿、招猿等あるが平明で面白し

譽田神社の埴馬　傳説は面白いが、實物は素燒無彩の埴輪馬

兵庫縣

有馬の人形筆　有馬溫泉の名物、創始以來約三百七十年といはれる

鳥取縣

鳥取の獅子頭　長い一本の角を生やしてゐるのが特長であるが、尤色のものである、空想的な構圖がいゝ

流し雛　斷然美術的なもので、乳の祈願とされ、名玩の名を全國に馳せてゐる

姉様　黍殼製と繻子おやまと紙おやまの三種、共に立派なるもの

面被り　裏面の竹串を繰ると子供の押繪が動き出し、面を脱いだり、被つたりする

倉吉のハコタ　張子、倉吉は土偶よりこの張子に面白味がある可愛いゝ女の子の人形

ヤツチヤ　五月初節句に祝ひとして贈る木太刀、きれいな模様で彩色してある

米子の姉様　全國の姉様中の白眉

島根縣　松江の蒸汽船　木製、車の付いた蒸汽船で、愉快にも日の丸の旗が船尾にこれ見よとばかり翻つてゐる

お宮様　蕪雑ななかに扉がちやんと開くのが妙

獅子頭　子供の作るやうなもの、がそれでゐて、どつかにしやんとしたところがあつて面白い

岡山縣　吉備津神社の犬　土偶、他に鳥あり、吉備郡眞金村吉備津神社より頒與す、魔除の守

倉敷の虎　張子、尾のピンと立ちたるが特長

津山天神　所謂天神雛、黒塗の臺座に坐つてゐる、土偶にしては珍らしく巧緻なるもの

久米天神　作風津山と同じなれどこの方にいくらか手法にスキがあつて土俗玩具としての好感もたる

山口縣　大漁人形　五人の童子が大鯛を鬼いてゐる、土偶、面白し

香川縣　奉公さん　張子のおぼこ人形

高松のちようさ　神輿である

金比羅デコ　小形の土の首人形、金比羅宮の門前で賣る

根付の天狗　朱と緑の二種、小さな木彫で河童のやうな顔をしてゐる

淨願寺の禿さん　高松で販賣、狸の張子の兵隊さん

屋島の禿さん　同じく高松で販賣、笠を背負つた狸の張子、共に新らしく發生したものであるが、傳說から出發しただけ面白い

徳島縣

徳島の三番叟　張子の首人形、糸をひくと笑つたり怒つたりする

犬張子　吠えてゐるところが特長だらう

張子虎　首の動かない坐り虎、口を開き前脚を伸ばし尾が直立して天を衝いてゐる

彈き猿　張子の猿がついてゐる

大津の淨瑠璃人形　阿波の操り人形から來たもの、したがつて雅趣が十二分ある

鞍付馬　大津の張子の代表的作品である臺車付の飾馬

首デコ　通稱ワン〳〵と呼んでゐる、未來派、構成派式の模樣のある大風

撫養のまる凧　徳島市を中心とする各社の秋祭りに販賣、木製神輿

徳島ヨイヤショ

愛媛縣

松山の女達磨

鎧人形　雅趣豐かなもの、小さな操り人形である。首は同所産に數種あつて、ちやんと取替へられるやうになつてゐる

獅子頭　凄いもの、一本角の白毛の舞樂獅子

宇和島の牛鬼　宇和島を中心とせる各社の秋祭に販賣、張子製

八つ鹿面　張子の布付き遊び面

宇和島の首人形　土偶捻り

高知縣

相合傘　あまりにも有名だ

女達磨　特長あるもの、達磨にしては長顔、俗にしてのどかなり

姉　　様

高知をいまや脱け出で、全國的に活躍してゐるリリヤンなどをいゝ氣で飾つてめかしてゐるのがこれなり

室戸岬の鯨
室戸岬の鯨車

土臭豐富なるもの、漁師の內職の延長で、鯨はグロ的である

福岡縣

博多の土人形
笹野才藏
梟笛

同じ元締でも土俗臭が皆無、が昔はよかつたそうである

傳說玩具であるが、これなどはその昔のよかつた方の部なさうである

その中でこれなどは傑作の方だらう、この地方で「コーヅ」と呼んでゐる

博多の板獅子
藤崎の猿面
太宰府の雲
火除鬼面
梟笛
英彥山から〳〵

ビツクリするものに、この板獅子がある。南洋のお化けのやうな獅子、もつて冥すべし

福岡市藤崎猿田彥神社の初庚申に頒與す、猿の土面にて珍し

正月七日太宰府天滿宮で授與、全二十有餘社から授くる雲の元祖だけあつて、その構想の妙どつかに崇高さと威嚴を備へ持つてゐる

同日露店で鬻ぐ。同祭の「鬼くすべの神事」に被る鬼面を模したもので火除の禁厭としてよろこばれる、土製、張子の二種

同日露店で鬻ぐ、ウソ笛といふ人もあるが博多の梟笛と變りなく、いくらかこの方が土臭味が多いか

英彥山權現で頒與す、土鈴の王として名高く

参詣者がこの土鈴をガラ〳〵いはせて山から降つて來るといふので「がら〳〵」の異名がついてゐる

柳河の雉子車　木製、土俗趣味豐かなもの、背に三俵の俵をつけたもの、小雉子を背負つたもの、單獨のもの等ある。近在清水觀音の門前で鬻ぐ

柳河の女達磨　張子の小達磨、特異のもの

宮地嶽の三柱神像　宗像郡宮地嶽神社の門前で鬻ぐ、多紀理比賣命、市杵島比賣命、多岐都比賣命の同社三柱の神々を象つたもの、土偶

梟笛

大分縣　別府の木でこ　朝鮮の大將軍の後塵を拜したるもの、それだけ日本土俗にそぐはぬところがある

長崎縣　鯨潮吹　車付臺の上に張子の鯨が乘つてゐる、構想妙稚をもつて名高し

ペーロン船　端午の佳節を中心として、その前後に行はれるペーロンに出る船を模したもの、ペーロンとはボートレースのやうな競技で、南支那の唐人が長崎へもちこんだものだ

古賀の馬乘猿　土偶

ぽーぽー鳥　土偶、梟笛であつて、赤黑の二筋の線が描かれてゐる面白いものだ

お蘭さん

阿茶さん　前者はオランダのキャプテン、後者は唐人阿

茶さんで、如何にも開港場所産らしい氣分の
する土偶、その他紅毛人を取材にしたるもの
數種あり

長崎の風

「ハタ」と呼ぶ、至極アッサリした品のいゝも
の

熊本縣

熊本のお化金太郎

「眼返り金太」とも呼ぶ、黒の烏帽子を被つた、
眞赤な金太郎が糸を引くと、舌を出したり、
眼をむいたりする、大きな首人形

長太郎べんた

土偶スッ裸の女の子がスッ裸の赤ん坊を抱い
て立つてゐる、そして、その赤ん坊がバラソ
ルをさしてゐる

べんた

孝女おきんを、偲ぶもの

勇み金魚

竹弓の糸を板の金魚が踊りながら上り下りす
る可愛いゝもの

手取神社の雲

四月二十三、二十四、二十五の三日の手取本
町手取神社大祭に授與、太宰府の雲の長男み
たいだ

木の葉猿

土偶猿中での王様

宇土の首馬

宇土の張子には特色あるものが多い、これな
どもその一つ

獅子頭

清正公みたいな獅子頭、かたくて精神が直だ

面

毛だらけの大天狗と、烏天狗の二つ、一寸夫
婦を、氣どつたつもりだらうが、オヨソこわ
いミタイ

日奈久の木製

葦北郡日奈久町で出來る木製玩具はあまりに
も、文明とはなれすぎた感が深い、しかも迫

人吉の雉子車　力の薄い恨みがあつて
人吉の戎市に鬻ぐ。この人吉には面白いもの
しつかりしたものがある、これなどは日奈久
のそれと同日の談ではない

彈き猿
跳ね猿
彌次郎兵衛　猿の彌次郎で、稚氣愛すべき尤品

宮崎縣

鶉車　東諸郡法華嶽藥師の門前に鬻ぐ。同じく宮崎
郡久峰觀音の門前でも鬻ぐものもあるが、前
者の方面白し、共に長壽開運の禁厭

青島雛　宮崎郡青島村青島神社に夫婦和合、安産の祈
願に奉納するもの、赤の格子縞の古代的の土

首の紙雛　最高峰の土俗玩具、五月幟につける、張子に
延岡の昇り猿　して珍らし

鹿兒島縣

鯛車　舊三月十日國分八幡藤祭に鬻ぐ
化粧箱　同じ
鳩笛　同じ、土偶
鹿兒島の絲雛　名高し
馬乘武者　端子の武者人形、板、藁、布、紙、竹といろ
いろな材料でつくり上げた大がゝりのもの

沖縄縣　ヤンバル船

刳り船

沖縄の三船、共に桐材の船であるが、茶色木綿の帆をかけた無彩の刳り船に双手を上げたい。しかし共に支那式の異臭ある船で内地産とはまるで異つたもの

爬龍船

喧嘩鶏

車付臺板の上の鶏が、蹴合ひをする、張子、彩色共に面白し

馬乗人形

那覇の行事競馬祭りに出る風俗からとつたもの

面

内地とはまつたく境地が別世界で、風變りなものが多く、しかも筆致こまやかで、出來もしつかりしてゐる

土人形

鳩、雉子、虎、犬等數種あり共に彩描面白し

跋

世の多くの人達が、萬葉集を崇み、萬葉集を讀んでゐる。これは決して短歌の手本としてだけのものでなく、祖先達の生活の姿を、集にもられた短歌といふ文學を通じて、知り學ぶためにするのであることは、誰しも知つてゐる。

この集は、その萬葉集を旅の傳說玩具に換へ、短歌を祖先達の手につた造型の一箇に換へたものである。

したがつて、こゝに蒐めたものは、私の創作でなく、どれもこれも全部が、私等の祖先達の言葉であり、哲學であり、美術であるのだ。

唯、私の筆が拙なくつて、あるひは、いくらかでも、往時の人達のこころより表現に遲緩したところがあるかも知れないが、これは、私の筆の拙さで、しかし毫も祖先の當時の思想や生活の核心は曲げて書いてゐないつもりである。

その點は、御安心を願ひたい。

しかし、これだけでは全部ではない。私は、これ以上に、未知のものが、地上にまだ〳〵殘つてゐるとゆめみ、たのしみ、そして研究を續けてゐる。

旅に出てゐてもよい、私は、こゝろならずも、旅に出てうつろな約十年もかなたこなたと彷徨し續けて來たが、いま東京にかへり、家庭をもつて、想ひ出にその當時のものを繰り展げてみるとこれ丈の、樂しい收穫が、旅のトランクの底にくつついて來てゐるのだ。

彷徨の旅は悲しかつた。しかしかうしたことによつて、またその哀愁が展へて大きな欣び、こみあげる愉しさにかへすことの出來たのも旅だつたからであらう。

私は旅に感謝する。それと、その彷徨した間にあつて、私を正しく導き、私のこゝろを鞭打ち、私をより愉しくさせて呉れたもろ〳〵の祖先達の手になつた、この集にあつめたやうな傳說玩具に感謝する。

玩具は小さいが、祖先の手は大きい。玩具は小さいが、祖先の生活は

じつに根づよく、遠く私共の血にかよひ、私共の肉體に脈搏となつて通

つてゐる。

私はいま非常に愉快である。

巻末ながら、この書の上梓にあたつて、一切ならず御世話になつた羽根田友司、吉田慶四、江澤榮魚氏と、尚、親身になつていろ〳〵と世話して下さつた卜部趣治、松岡貞次、長岡とみ子の三氏、裝幀者片野一男氏に厚く御禮を申し上げる。

昭和十一年十月二十五日

著者

著者　萬造寺龍

限定版第一號

發行者　東京市日本橋區吳服橋三ノ七　藤田晛

東京市牛込區新小川町一ノ二

印刷者　野見山恭行

東京市日本橋區吳服橋三ノ七

發行所　旅行界發行所

電話日本橋四五〇五・四五四六

振替口座五四〇七八番

昭和十一年十月二十九日印刷

昭和十一年十月廿一日發行

定價　金一圓八十錢

720
99